

古典解釈と自然言語処理

時枝文法における「条件法として解釈される連体形の一用法」からの示唆

佐良木 昌

序章

「条件法として解釈される連体形の一用法」〔時枝 1958: 1-9〕（以下では、五八論稿と略称する）および『古典解釈のための日本文法』（増訂版）〔時枝 1959〕において、「連体形＋係助詞―情意の形容詞述語」の文型を中心とした事例を報告し、古文連体形が条件法として解釈可能なことを時枝誠記は指摘した。この時枝説については、寺村 [1980: 265]、西尾 [1982: 94]、高橋 [2006: 68]

がわずかに触れた程度であり、十分吟味した論稿は、前記増訂版以降、管見の限りでは見当たらない。そこで本稿では、第一に、連体形用法についての時枝説およびその言語学的前提について検討する。

第二に、五八論稿の検討を前提に、現代文の連体修飾節について、主に主節主格を成す主名詞に係る連体修飾節を観察し連体修飾節が条件法として解釈される事例を見いだすことができるかを検討課題とする。続いて、当該連体修飾節と主節との関連の意味について分類することを課題とする。条件法として解釈され

るということは、連体修飾節の述部が主節の述部と意味的に連関しており、連体修飾節を連用修飾節に換言できる根拠があるということである。連体修飾節と連用修飾節との関連については、益岡 [1997] や奥津 [2007] の研究があるが、さらに形容詞述語文を中心に、さらに詳しく、連体修飾節末の述部と主節の述部との意味的に連関について検討する。

第三に、連体修飾節と主節との論理的関連の意味分類に基づき、連体修飾節を連用修飾節に換言するという実験を試みる。連体修飾節を連用節に換言できるとすれば、換言を媒介に連体修飾節の英語などへの翻訳手法の緻密化が予想される。そこで、連体修飾節の翻訳手法を開発することが本稿の課題となる。本稿文末の補節において述べるが、英文において制限用法の関係代名詞節と条件節との換言可能性について、また非制限用法の関係代名詞節と理由節との換言可能性について、Quirkらの研究があり [Quirk et al. 1985: 1238-1241]、独文についても、関係代名詞節と条件節との、また理由節との換言についてフレーゲが論理的に検討している [フレーゲ 1999: 71-102]。

第四に、右の知見を摂取しつつ、すでに筆者らが提案した仮説「連体節を連用節に換言可能であるとき、連体節は主節述部に意味的に関わる」〔佐良木・新田2008〕および「連体節を連用節／シテ形に換言可能であるとき、連体節の英訳は、関係節ではなく従属節・分詞構文が適切である」〔佐良木・岩垣2010〕について検証する。

以上を約めるならば、本稿では、時枝説から摂取した事柄（第一章・第二章）に基づいて、古文連体形の条件法に当たる現代語の連体修飾節の用例を整理する（第三章）と共に、その連体節英訳手法を検討する（第四章～第五章）。すなわち、本稿後半は、機械翻訳の英訳手法を高度化する、その作業の一環である。

日英機械翻訳の知識は、機械学習によって集められるという性格のものではない。膨大な対訳コーパスは産業翻訳の商業的結果であって、高度な翻訳知識を基礎とはしていない。しかもノイズとして無視できないほど誤訳を含んでいる。「質の悪い（稚拙な）翻訳例を学習用対訳コーパスとして、統計システムに学習させると翻訳成功率はたやすく降下する。」〔新田2012: 186〕ために翻訳精度の向上には寄与するところは少ないと思われる。たとえば、次の平易な和文の英訳を観察してみよう。まず、和英辞書の和文英訳例である。

先生の家へ行ったら、いつもは恐い先生が笑顔で迎えて下さった。

We went to the teacher's house, and though he's usually so

stern, he greeted us with a smile.

和英辞書

辞書訳においては、「先生」を修飾する連体節と主節との論理関係が正しく把握され連体節が though 譲歩接続詞節に英訳されている。全体として、先生宅訪問↓先生のいつもの態度↓先生の対応という話の推移は再現されている。

次に大規模対訳データを誇る統計翻訳ではどうか、以下に示す。

I went to the teacher's house, scary is always the teacher
who have greeted with a smile. 統計翻訳

こちらの英訳では、連体節と主節との論理関係は英文上に表されていない。関係代名詞節の時制を観ると現在完了であるから先生は以前から笑顔であるからいつも怖いという判断とは相容れないことになる。また、「先生」と「怖い」との意味関係から、「怖い」は畏怖の念であって恐怖ではないと推定することはできないようだ。要するに、原文の意味が捉えられていないことから錯誤の英文にならざるを得なかったようである。ここで、統計翻訳で右の英訳文をそれぞれ和訳してみよう。まず辞書英訳文の和訳である。私たちは、先生の家に行き、彼は普段は厳しいですが、彼は笑顔で私たちを迎えました。

論理関係が明示的な英訳文は、統計翻訳において適切に和訳されている。次に、統計翻訳英訳文の和訳である。

私は怖いが、いつも笑顔で迎えてきた教師で、先生の家に行きました。

ミゼラブルな訳文と言わざるを得ない。

実践的な翻訳知識、本稿で提案している「連体節を連用節に換言可能なとき、その英訳は従属節や分詞構文が適切である」という翻訳知識は、産業翻訳コーパスには含まれてはいない。優れた文芸翻訳や学術評論翻訳のごく一部に含まれているのみであり、これらを集めたコーパスは寡聞にして管見の限りではない。したがって、翻訳知識の源泉は、優れた翻訳家の実践的知識にあり、これらを丹念に集め学ぶことが唯一の道と思われる。本稿では、翻訳家による翻訳例と文法的語彙的正確さを基礎とした辞書対訳例を源泉として連体節英訳に関する翻訳知識をとりまとめた。

なお、以下では連体修飾節を連体節、連用修飾節を連用節と略して用いる。また、形容詞について、古語の場合は情意の形容詞、情意の表現、現代語の場合は感情形容詞、感情表現ということとする。

第一章 言語過程説の確立途上における用例分析の方法

時枝の学的探求の時期を、初期、前期、中期、後期と区分して、以下の論述の便宜とする。

【初期】『岩波講座「日本文学」国語学史』【時枝1932】までの時期（卒論の一九二七年～一九三三年）

【前期】その翌年（一九三三年）から、単行本『国語学史』【時枝1940】および『国語学原論』【時枝1941】、そして東京大学に講座を開く（一九四三年）までの時期

【中期】『国語研究法』【時枝1947】[14]・『日本文法口語篇』【時

枝1950a]・『古典解釈のための日本文法』（一九五〇年）【時枝1950b】[16]から『日本文法文語篇』（【時枝1954】まじを、『国語学原論続篇』【時枝1955】まじ

【後期】『現代の国語学』【時枝1956】・『文章研究序説』【時枝1960】以降『講座日本語の文法』【時枝1967】まじ

以上のように仮区分する。

前期の早い時期（一九三三年～一九三六年）には、古典解釈の方法および品詞論に関する一連の諸論文がある。以下、列挙する。

「源氏帚物語帚木卷冒頭の解釈 「やるは」の語義用法に基いて」【時枝1933a】

「古語解釈の方法 「やるは」を中心として」【時枝1933b】

「語の意味の体系的組織は可能であるか」【時枝1936a】（執筆は一九三五年、以下、「体系的組織」という略称を用いる）

「国語の品詞分類についての疑点」【時枝1936b】

「形容詞形容動詞の連用形に於ける述語格と副詞格との識別について」【時枝1936c】

右に列記した時枝の諸論文を通読すると、それらに学問の方法への強い問題意識が示されていることに気付く。前期の諸論稿では、意味分析において語の多義を一義に定めるのに語の用例の類別を以てする、という方法が、実践されている。この分析方法は、本居宣長が採った用例帰納の方法を批判的に継承することによるものである（第二節にて詳述する）と共に、時枝自身による古典語を解釈し分析する作業過程において、確立されたものである。

この分析作業にあたって導入されたのが、「対象語」という文法範疇である(第二章第一節において詳述する)。この範疇の導入が、意味分析の方法が文の統語構造分析の方法を指定する、その可能根拠を与えたのである。意味と統語との統一的分析の帰結として、対象語を採る形容詞は情意性意味を表し対象語がその情意の対象を表すこと、他方、対象語を採らない形容詞は状態性意味を表すこと、これらを実証したのである。

『国語学史』の序説において時枝は、国語学³⁾の対象を規定する方法について論究して、外部的原理によって規定してはならず「対象自体の内に具有する原理」を明らかにしつつ対象を輪郭づけていくべきであると言う「時枝1940」。近代西洋の自然科学的な分析方法、すなわち単位的要素に全体を分解・還元することによって対象の本質規定を定める方法を、無批判無媒介に言語学に導入しようとする傾向を批判してのことである。前期において端的に自覚された「語の意味の理解」⁴⁾「時枝1931」の方法が国語学研究史の方法に活用されて単行本『国語学史』に結実する⁵⁾。前期の後半においては、言語過程説の根幹が形成され、学史を下向分析の前提として言語本質論の構築である『国語学原論』に結実する(以下『原論』と略述する)。

時枝の学の方法論および自然科学的方法の導入への批判は、『原論』以降の諸著作においても繰り返して強調されている。言語は自然科学の対象とは異なるがゆえに分析の方法も学的方法も異なり、研究対象の特殊性を無視して自然科学的な原子的構成観から

帰結される形態素の分解と合成という方法を探るわけにはいかならぬというのが時枝の立場である。

第一節 本居宣長の用例分析法を批判的に継承した意味分析の方法

時枝は、その前期前半の論文「体系的組織」において、意味分析の視座を、(1)語の職能上(文法的機能のこと)の類別と、(2)当該の語と他の語との接続関係とに据え置いた。これら分析視座から、意味の差別に応じた類別を用例から帰納すること、および「語の意味の体系的組織」を見いだすこと、これらの課題解決の一環として、形容詞の意味分析と体系的分類とが試みられた。

上記の論稿に拠れば、時枝が採った意味分析の方法は、本居宣長による古典解釈の方法を批判的に摂取・継承することによって獲得されたものである。宣長が採った古典解釈における語の意味理解法は、「語の意味の研究はその語を使用した話者の思想に還ること」であり、「あたえられた語の、その時代における用例用法の蒐集の上に立つて、語の意味を帰納的に理解しようとしたことである。」「時枝1936a: 1973: 208-212」やや詳しく引けば、「語を分解法によらず、又本義正義に槌らず、それ自身を不可分の統一体として、用例に基づき、帰納的に語の意味を決定しようとする態度」であり、同時に、「一時代における意味の静態的研究」⁶⁾「時枝1936a: 1973: 209-212」である。しかし、時枝に拠れば、宣長の帰納的な分析方法には、活用形や職能の観点から意味の差別相を認識することがなされていない。その統語論的究明の弱さを克服

するには、意味の差別が何等かの類別に対応して現れてくるものであるならば、その類別に応じて意味を分類整理する必要があると時枝は言う。重要な論拠であるので、長くなるが厭わず引いておこう。

「即ち意味の差別は、用例の何等かの類別に対応して現れて来るものであるのか。若しそういう事実が存在するならば、用例の類別は、如何なる事実に基づく類別なのであるか。私はこの探索の歩みを大胆に進ませる為に、更にこの類別の基礎事実について想定を試みるならば、想像されることは、語の用例の類別は、一はその語の職能上の別に対応するものではなからうかということ。例えば、一の形容詞が、述語として使用される場合、修飾語として使用される場合、副詞として使用される場合等に意味の差別が起こるのではなからうか。(以上は、接続あるいは活用の問題) その二は、与えられた語と、それと密接な関係に於かれて居る語との関係、例えば、一の形容詞が述語として用いられた場合ならば、その主語との関係に於いて、修飾語として用いられた場合ならば、その修飾語との関係において意味の差別が起こるのではなからうかと云うことである。(以上は位格の異同という問題) 語の用法の類別は、猶別の事実を想定することが可能であろう。それは更に深い国語の現象に対する洞察に俟たねばならないのであるが、それらの事実に対応する意味の差別を、私は仮に語の意味の体系的組織と名付けて、かくの如き体系的組織が可能であるか否かを目標として、その

実証的な調査を試みて見ようと思うのである。」(括弧内に記した注記は引用者によるもの) [時枝 1936a: 1973: 213-214]

この論述箇所では、意味分析と統語構造分析との統一的な取り扱いが述べられている。用例は二つの統語的な関係、即ち統語関係と位格⁸⁾とによって類別され、類別用例から、他の意味とは差別される語の意味の特殊相が認定されるだろう。言い換えれば、意味の特殊相は、ある統語的な特質、即ち型をもつということである。

第二節 帰納的意味分析の方法

時枝自身が採った帰納的分析の方法は、すでに「古典解釈の方法―さるはを中心として―」(一九三三年) およびその前に刊行された論稿「源氏物語帚木卷冒頭の解釈―さるはの語義用法に基いて―」(一九三三年) に開示されている。ここでは、①古語「さるは」について、「蒐集したものを帰納的に見渡して見たが何等の結論をも得ることが出来なかった。」②そこで、「同類と見られる用例を選び分ける作業を試みた。」③語の意義用法に「大きな類別がある事を見出した。」④見いだした類別を範疇として用いて用例を分類した、⑤この分類結果によって語の多義を「一つ概念によって解釈する」ことが可能となったと記述しているのである。ここには、時枝による意味分析過程が具体的に示されている。①の手法とは、おそらく、多義語についてその場その場でそこに最適である意味を採用して解釈するという伝統的な語義解

釈の手法を踏襲して用例間における何等かの規則性を見いだそうとするものであったろう。判断根拠無き主観的方法として批判した伝統的解釈法を採った意味は、この従来手法では多義を一義に絞る客観的根拠は見出しえないことを確認したということであろう。②の用例間に類同性を見出すという方法では、(1)「さるは」を含む文または節および前後の文または節においては理由を云々する語はないという語彙的特徴を認定すると共に、(2)その文間あるいは節間の論理関係を、相反現象の同時並立と推定するという手順を採っている。これら帰納的分析の諸手順が実施されて、③の類別として、「さるは」を含む文の構造には、逆態法（相反する二つの事柄が両立する）の表現の有無という点に違いがあることが見出される。その結果、④の分類が可能になり、妥当な意味解釈の客観的根拠を得ることができる。やや詳しく言うならば、「さるは」の意味用法は、甲類（「さるは」の次に逆態法の叙述を含む文を伴う場合）と乙類（「さるは」の次に逆態法の叙述を含む文を伴わない場合）とに分類されると同時に、この二分類によつて整理された「さるは」に同一概念の存在を認定でき、この同一概念と職能とによつて、個別用例に於ける妥当な意味解釈の客観的根拠を得ることができる。

時枝は132の用例について綿密な分析と解釈とを、右に示した一九三三年の二つの論稿において列挙しているが、この列述は、もちろん、右に概括した帰納的分析の方法を用いて得られた分析結果を、論証過程に配置したものであって、帰納的分析の過程そ

のものではない。挙げられた用例は、分類体系を示す例証として配列されているのである。また、「体系的組織」の論稿においては、162の用例を分類しているが、これら事例のように、実に多数の用例を綿密に分析している。時枝の学説が地道な作業に支えられていることの証左である。多数用例を一覧可能にする情報処理技術を用いる用例分析では、時枝の用例は物の数ではないかもしれないし、統計的な分析にとっては標本数の不足という問題点をはらんでいるかもしれない。だがしかし、処理される多数標本は一つ一つが内省分析の対象ではなく、したがって内容面が捨象されているがゆえに意味分析がなしえない。意味分析が可能であるためには、時枝の帰納的分析の手順の如く、一文一文における語の意味的類別と統語的類型とを認定する作業が必要であることは自明である。

こうした帰納的分析による発見の方法と分類原理の設定とが、「語の意味の体系的組織」の論稿における形容詞の意味分析にも適用されている。以下、次章にて観ていく。

なお以下では、連体形あるいは連体節が表す事柄と主節が表す事柄が相反する関係にあるとき、この関係を時枝説に従つて「逆態」と呼ぶが、「相反」または「逆条件」と言い換えるときもある。

第二章 形容詞述語文の意味分析

一九三六年の三つの形容詞意味分析の論文、「体系的組織」の論稿、および同論稿に続いて同一一九三六年に刊行された二つの論

稿、「国語の品詞分類についての疑点」、「形容詞形容動詞の連用形に於ける述語格と副詞格との識別について」において、形容詞の意味分析を時枝は提示している。その分析方法は、「体系的組織」の論稿中の本論「語の意味の理解の前提となる種々の言語現象の観察」の章建てが直裁に示しているので、まずは、ここに引いておこう。

- 一 形容詞の主語と対象語
 - 二 形容詞の情意性意味と状態性意味
 - 三 対象語と形容詞の意味の関係
 - 四 形容詞の述語格と副詞格との間に存する意味の差別、特に誤られ易い連用形について
 - 五 連用形副詞格に類似する話者の情意の表現法
 - 六 形容詞の修飾格、及び述語格を保持する形容詞の連体形
- 一及び二が意味分析の方法的前提であり、一が統語論的な前提であるとするならば、二は意味論的な前提である。そして三が、意味と統語とを統一的に分析する視座の設定である。四以下が、意味論的＝統語論的な分析の具体的内容を論述する部分である。一及び二において方法的な前提として導入された三つのカテゴリは、四以下の分析によって論証されるといって構成になっている。
- 上記章建てが示すところ、「対象語」という文法範疇および、そして「情意性意味と状態性意味」という二つの意味的範疇によって用例を類別して語の意味と用法とを一体として把握するということである。これらカテゴリは、帰納的分析の結果において得ら

れたものであり、分類原理として予め設定されたうえで、形容詞の意味分析が論述されている。これは学問の叙述方法に沿った論述であるということが出来る。以下では、形容詞意味分析の方法について詳しく検討する。

第一節 文法範疇「対象語」の指定による意味分析

時枝は、「体系的組織」を執筆したが、そこにおいて、情意の対象あるいは機縁となる語を「対象語」と名付けた。「対象語」という文法範疇は、管見に入った限りでは、この論稿において初めて採用されたと思われる。この文法範疇の導入によって、形容詞の意味分析が一気に進んだのである。

狼は恐ろしい
母恋し

これら例文について、「体系的組織」の論稿において時枝はこういつている、「狼、母は夫々恐ろしい、恋しの主語でなく、それらの感情の機縁となり対象となる語である。主語は「彼」か「私」か、ともかく右の感情の主体でなければならぬ」〔時枝 1936a, 1973: 216-217〕。以下、同論稿について立ち入って観ていく。

「体系的組織」の論稿において、時枝は、「対象語」を指定することにより、以下の事柄を明らかにした。

- ① 「情意の主体に所属する情意の意味 (B) と、対象の属性に所属する状態性意味 (A) との二面を併有」する形容詞の用法を類別できること

② 「主語—形容詞述語」の文型 (I) を採るとき、形容詞は状態性 (A) を表し、「対象語—形容詞述語」の文型 (II) を採り (主語は明示されていない) とき、形容詞は情意性 (B) を表すこと

時枝によれば、「私はこの本が面白い」といった文においては、「面白い」は「私」の感情を表すとともに、面白みという属性を備える「この本」が感情の対象であると解釈して、当該の文が「主語—対象語—形容詞述語」の型をなすと見ることが出来る。しかし、「彼は面白い」といった文型においては、そうではないという。一方で、「私」という主語が省略されていると視るとするならば、「彼」とは私に「面白いという感じを起させた対象であり機縁」[ibid.: 216] であって、この文は、「対象語—形容詞述語」の II 型を採っているのであるが、他方で、「彼」を主語と視るならば、I 型の文型であり「面白い」は「彼」の性格たる滑稽さなどの属性を表している。こうした文型 (I / II) と意味 (A / B) 「との類別に基いて、「対象語の位置にあるものを主語とする時は (I 型)、その述語的形容詞は、対象の属性を示す状態性意味 (B) のみを以て解釈する。」[ibid.: 220] との知見を得たのである。

③ 「気持ちを表す意味と、状態を表す意味とが合体して一語を以て表される」(1) と共に、感情主体の気持ちを表す語と、感情の対象あるいは感情の機縁となったものであるものの状態を表す対象語とが分離されることがないこと(2)を指摘していること

前者(1)については、以下に示す図一「時枝 [1973: 219] よって (A)・(B) とギリシャ文字記号および囲み線は引用者によるもの)、形容詞の意味分布のスペクトルを示している。一端には、「対象所属の状態性意味」(A) を表す語 (高い・低い・赤い・深い・太いなどの α 群) を配し、他端には「情意の主体に所属の情意性意味」(B) (恥ずかしい・望ましい・ほしい・恋しいなど β 群) を表す語を配して、両端の中間帯 (β 群) には、両方の意味を含む語 (にくらいい・面白い・をかしい・淋しい・暑い・恐ろしい) を据え置くことで、二つの意味カテゴリー (後に三つ) による形容詞の分類体系を示している。管見に入った限りでは、この形容詞の意味分類体系が最初であろう。ただし、時枝は現代語の形容詞を図中に示しているが、実際に用例分析を重ねているのは古語であって、後述する古語の形容詞「をかし」の意味分析で触れるように、古語と現代語との意味的差異については踏み込んでいない。したがって、古語における意味スペクトルは別途、考案すべきだろう。

最後に、時枝の採った意味分析の方法を整理しておく。

一 まず対象語を指定しての、形容詞述語文の用例間の比較対照において、当該形容詞の表す意味は状態的のみでなく情意的もあることが判明する。

二 形容詞の意味決定は「最初から主語を決定せず、情意性のものか、状態性のものかを目標として主語を想定しつつその意味を帰納していく必要がある。古典の文面の解釈に於いて、この二の意味の観念を導入することは、主語の想定と相俟つ

		A	
		高	い
		低	い
		赤	い
		深	い
		太	い
		α	
β	にくらしい	にくらしい	β
	面白い	面白い	
	をかしい	をかしい	
	淋しい	淋しい	
	暑しい	暑しい	
恐ろしい	恐ろしい		
γ	戀しい		
	ほしい		
	望ましい		
	恥しい		
B			
		B	
		情意の主体に 意味の所属性	

図一 時枝 1936 による形容詞の意味分類

- 一、古典の理解を散漫より防ぐ必要な武器であると思ふ。」
- 三 古典用例からの帰納的分析において、日本語のある種の形容詞には意味の二面があり、「気持ちを表す意味と、状態を表す意味とが合体して一語を以て表される」ことを見出し、この現象を日本語形容詞の特質として把握する。
- 四 多くの形容詞は二面の意味を表し、「状態性意味はその情意の主体に属し、情態性意味は、対象の属性に所属」する。

第二節 対象語と形容詞との意味関係

— 「対象語—形容詞述語」における感情の対象と感情の機縁との区別 —

感情の対象あるいは機縁となるのは、コト・モノ・ヒトである。西尾 [1983: 80] によれば、万葉集の傾向として、①感情形容詞の対象になるのは実体そのものであるよりはむしろ実体を包含したコトであるが、対象への志向性のつよい感情をあらわす感情形容詞(愛^{あひ}・なつかし・憎^{にく}し)の述語文では、実体をあらわす具体名詞が対象語になることもある。②「実体ではなく、コトが対象語として表現されるときにいろいろな様式」[Ibid: 91]としては、(a)「恋・旅・よのなか」などの抽象名詞が対象語、(b)用言や活用連語の名詞化されたものが対象語(特にク語法)、(c)用言の連体形がいわゆる「準体言」として用いられた対象語、(d)「感情の対象や機縁になるもの」が条件句によってあらわされる場合(c)その一つとして感情のなりたつ情況が「動詞已然形+ば」の形をもつ条件句、以上が認められる。ここでの、感情の対象あるいは機縁が「準体言」の用法で表現される場合(c)というのが、次章で言及する連体言の一用法である。

次章では、この西尾分類も斟酌して、対象語—情意の形容詞述語の文型において、感情の対象あるいは機縁が、①コトで表現されるのか、モノで表現されるのか、ヒトで表現されるのか、(b)情意の対象として、モノ・ヒト・コトが意味的に整合しているかどうか、②コトで表される場合、(a)抽象名詞のコト、(b)用言や活用

連語の名詞化されたコト、(c)連体形の体言化によるコト、以上のいずれなのか、以上の分類観点に立ちつつ、「対象語―情意の形容詞述語」の文を中心に、その用法を覗いていく。ただし、万葉時代（七世紀後半から八世紀の前期中期）における対象語の傾向分析が、そのまま源氏物語（十世紀末から十一世紀初頭）にも妥当するとは言えないだろうが、西尾の分類観点は有効であると考えられる。

なお、古語におけるコトとモノとは、概念的に截然と区別されているわけではなく、根来 [1973:3-20] が指摘するように、コトに対する感情が「ものあはれ」と表現される事例がある。根来によれば「源氏物語のなかには『もの』形容詞が三十四種二百七十七例、「もの」形容動詞が二十六種百二十八例」と頻度が高く、接頭辞に転化して形容詞やいわゆる形容動詞を作っている。例えば、「夜深き鶏の声の聞えたるも、ものあはれなり。」（源氏）「若菜上」というように、場面（深夜の静寂）において、何かのコトを機縁として、漠とした心の有様が起る、これを「ものあはれ」と表す。このように感情対象が漠としており感情との関係も截然とはしておらず、むしろ主客が融合している表現であろう。現代語においても「もの悲しい」といった感情語があり、場面における感情表出の表現は、対象と感情とが融合する日本語表現の特質と捉えるべきだろうが、本稿では踏み込まない。

第三節 対象的因果的な感情惹起の表現と内的自省的な感情生起の表現

「体系的組織」の論稿において時枝は対象語と感情形容詞との媒介的な結びつきについて、次のように言う。「虎は恐ろしい」においては、「虎の持つ属性が直ちに恐ろしいという情意に対応」しており、対象語と形容詞の意味とは密接な関係にある。一方、「或る対象を機縁として、そこから起る種々な想像思惟を仲介として結ばれることがある」と分析し、「従って全く矛盾した様な対象と感情の結合や、又距離の非常に懸離れた（対象と、感情との）結びきをなして居ることが存在する」。「時枝 1936a: 1973:223」（括弧内は引用者による補足）との知見を示している。すなわち、同論稿では、「対象語―情意の形容詞述語」の文型(II)においては、

(II a) 対象語が感情の直接的な対象を表すもの
 (II b) 対象語が感情の機縁を表すもの

この両者が区別されている。

同論稿では、対象語が感情の機縁を表す古文用例、即ち対象語が感情の媒介的な対象を表すもの(II b)を採り上げて、対象についての想像や思考の作用に媒介されて感情が起るという表現意識の過程に言及している。媒介的な関係は「全くその場合に於ける主観と対象との特殊なる意味関係によって成立する」のであるが、特殊なる関係については、古文用例の個別具体的に分析することとどまり踏み込んだ意味関係分析は呈示されていないし、後に時枝が解明した場面論「時枝 1938a, 1940」を踏まえて

いるわけではない。けれども、ここでは具体的分析に含まれる積極的な知見を確認しておくべきだろう。

「形容詞の意味するものが、対象語の属性を意味するというよりも、対象を機縁として、それに就いて更に想像思惟が起り、その上に構成される主観の情意を表して居る」[時枝 1936a: 1973: 225] (II b) という。対象と情意との心理的距離が遠い事例についていくつか例文を解釈している。その一つ、「苦しかった昔がなつかしい」という例文を挙げ、苦しかった昔を機縁として、「全然反対の感情を惹起し、或は、対象を仲介として、新しい思惟によつて起こった感情である。」(1973: 223) と解釈している。少し補足すれば、苦しかった昔となつかしいという感情とは、意味的に隔絶しており心理的距離が遠い。

しかし、本例などについての時枝分析では心理過程に傾いているが、認識＝表現の過程として把握すべきところである。主体にかかった困難に対する「苦しかった」という認識とその表現があり、その感性的な認識をモメントとして惹起した感情を、「なつかし」という情意の形容詞で表現した、この認識＝表現の過程はおさえられている。しかし、その上で、言語分析の基本である意味的＝統語的分析が求められる。その分析上の課題は、連体修飾の「苦しい」という情意の形容詞と主節の「なつかし」という情意の形容詞との意味的不整合についての究明である。対象語は「苦しかった昔(のこと)」というコトとして表されていると観て、「そのコトを懐古すると」という条件法に解釈できる。しかし、「対

象語(コト)―情意の形容詞」という文型において、「苦しい」と「なつかしい」とが意味的に矛盾をきたす。この矛盾を解決するには「苦しい」と「なつかしい」との間に相反関係があることを認めなければならない。「昔は苦しかったけれど今となっては、なつかしい」と逆態に解釈するのが妥当だろう(相反関係にある現代語事例は、第五章第三節を参照)。

続く事例として源氏物語から、対象語と情意の形容詞との(心理的)距離は少しも緊密ではない諸例を採り上げている。一つだけ引用する。

明け行く空もはしたなくて、殿へおはしぬ

時枝の解釈は、以下のとおり。

はしたなくてという情意性意味は、明け行く空の属性とは理解されない。情意の主体が明け行く空という対象に対して構成される特殊なる立場から理解されなければならない。つまり、明け行く空によつて、人に見られるとか、我身の姿が顕になるとか、いろいろな事実が中間に思惟として介在して居るにも拘はらず、話者の意識としては、単に明け行く空とはしたなしという感情の対応が意識の焦点に顕はれた事を意味する [ibid.: 223]。

この時枝解釈に踏まえて、本例について検討しよう。まず、形容詞「はしたなし」が表す情意の対象は、ヒトの行為(コト)と考えられる。同時代の『枕草子』にある例文「はしたなきもの。異人を呼ぶに、われぞとさし出でたる。」に観られるように、行

為(コト)に対して体裁が悪いという情意を、「はしたなし」は表す。この意味からすると、情意の対象に「空」が措かれるのは不整合をきたす。対象語「明け行く空」と情意の形容詞「はしたなし」とは意味的に疎遠である。「空——情意」という意味的不整合を許す根拠はなにか。それは、思惟の媒介であると時枝は観ている。想いがかべられたコトを対象として感情が起こるといふ媒介的な過程と時枝は捉えているといえる。そうではあるがここは、思惟の介在にも拘わらず感情の対応が表現意識の焦点に顕れたという矛盾を見極めるべきだろう。この点につき、若干検討しよう。

夜明けの場面が自分の身を省みざるをえないところに話者を措いたのであり、場面における内省をモメントとして「はしたなし」といふ感情が起こったと視ると、感情の対象は話者たる自己なのである。この自己意識を話者は表しているといえるだろう。したがって、本用例では、何かのコトを機縁として起こる感情の表現ではなく、場面に置かれた話者の自己意識の表現であつて、それを「はしたなし」と表しているが見立てるのが妥当だろう。対象は自己であるから、外的起因の感情ではなく内発的な感情といえよう。約めて言えば、対象—感情という表現構造ではなく、場面的な表現構造である、と考えられる。对象的・因果的な感情惹起の表現と、内的・自省的な感情生起の表現とは、文型は同じでも区別されるべきである。場面論に踏まえて対象語—情意の形容詞という表現態を見直していくことが必要であるが、以上に留める。

第三章 条件法として解釈される古文連体形の用法

『原論』[時枝1941]以降、言語過程説における文法論は、主要には、以下の三つの著作において展開された。

- (一)『日本文法口語篇』[時枝1950]。以下、『口語篇』と略述する。
- (二)『古典解釈のための日本文法 日本文学教養講座(第14)』[時枝1950]。以下、『古典文法』と略述する。

(三)『日本文法文語篇』[時枝1954]。以下、『文語篇』と略述する。これら一連の文法研究のなかで、『古典文法』には、「連体形の用法(一)〜(六)」に関する論述がある。後の増訂版[時枝1959]においては「連体形の用法(七) 条件法として現代語訳される連体形」が追記されている。初版と増訂版との間には、『古典の解釈文法』[時枝1953]が出ており、記載されているのは、『古典文法』初版と同じく六項である。前記「増訂版」の構成單元を引く。

一 「ぞ」「なむ」「や」「か」等の係りの助詞の結びとなる連体形

二 述語格を保持しながら下に続く連体形

三 主語を想定して解釈する述語格の連体形

四 被修飾語を想定して解釈する連体形

五 (主語—連体形の述語) || 述語) の構造を持った文

六 連体形とその被修飾語との複雑な意味関係

七 条件法として解釈される連体形の一用法

増訂版における「單元七」は、『国語と国文学』(三五卷二号、一九五八年)に掲載された五八論稿(「条件法として解釈される連体形の一用法——人づてに聞え侍るは、言の葉も続きはべらず(源氏物語権本)——」)の簡約版である。その構成を以下に示す。

- 一 問題
- 二 問題とされた例文(源語「権本」及び「総角」の一部より)
- 三 問題とされた連体形の解釈
- 四 (対象語——述語)の文構造
- 五 対象語と、連体形条件法との関係

「二 問題とされた例文」において、源氏物語から用例32を取り上げている。ここでは、右記第四項と第五項とを軸に、時枝による「条件法として解釈される連体形の一用法」について詳しく観ていく。源氏引用について時枝は「岩波文庫本」を使っているが、その引用を本稿ではそのまま用いている。

第一節 条件法として解釈される連体形と情意の表現

時枝によれば、古典語における連体形には、条件法として現代語訳されるものがあり、(一)体言相当の連体形は対象語である、(二)当該連体形は条件法として解釈でき、理由(の)で、「仮定(ば)」「逆態(とも)」の意味を表す、(三)その現代語訳では、連体形に形式名詞を補って古文を解釈する、としている。具体的には、連体形に修飾されると見なす体言「ノ」「コト」「モノ」等を補うか、或は連体形それ自身を体言と同格に解釈する(『古典解釈』増補版・

單元五および七)。時枝の挙げている例を五八年論稿から一つ引く。

らうたげなる様に泣き萎れておはするも、いと心苦し(源語「権本」、四ノ二六三ノ一五)

時枝によれば、「しをれておはする」という連体形は体言相当格を成し情意の形容詞「心苦し」の対象語である。その現代語訳では「泣き萎れておられるのも」というように、形式名詞「の」「もの」「こと」を補って解釈できる。このように体言格としてみるならば、「泣き萎れておられる」という条件法として解釈できることから、「泣き萎れておられると、痛々しい」という起因(条件節)——感情惹起(主節)の複文と視ることができる。かつ本例においては、「心苦し」の対象は、「泣き萎れておられる」というヒトの様子、すなわちコトであるので、情意の表現における「対象語(コト)——情意の形容詞」という意味的連関に整合している。なお、本稿では、形式名詞「の」「もの」「こと」のいずれを補うべきかについての論議には、踏み込まないが、現代語の「コト専用文は古典語でもコト型専用、ノ専用文は古典語では準体型専用、といった対応関係が認められる」「準体型」は感覚・感情・判断等の「対象」としてのみ用いられている(『青木 2005: 47-60』)という知見を参考とした。

以下では五八年論稿において時枝が取り上げた源氏用例の主なものを文型を整理して掲げる。「対象語——述語」という文型各種を小見出しにして示す(なお、括弧内引用番号は時枝が原典の順

に沿ってつけたものでそのまま踏襲する、用例文に付した傍線は時枝によるもの、二重傍線および助詞の文字強調太文字は筆者によるものである。原典の巻・条の参照は省く。

以下の用例文においては、連体形とこれを承ける係助詞または格助詞（太字で強調表記した）から成る体言格が対象語格と解釈される（時枝が傍線を付けた）。文末述語（あるいは節末述語）は、形容詞か動詞（二重傍線を付けた）である。以下の用例では、時枝解釈に基づいて対象語と述語との関係を示す。

a₁ 「動詞連体形+係助詞は／も／こそ—情意の形容詞述語」

- (三) 宿世異にて、外様にもなり給はむは、流石に口惜しかるべく、領じたる心地しけり
- (四) 明暮御傍に慣らはい給ひて、俄に別れ給はむは、辛き心ならねど、実に怨めしかるべき御有様になむありける
- (六) 只今の空の気色を、思し知らぬ顔ならむも、余り心づきなくこそあるべけれ
- (七) らうたげなる様に泣き萎れておはするも、いと心苦し
- (八) 余り情立たむもうるさし
- (一一) 心より外に空の光見侍らむも慎ましうて
- (一二) ……漫に頼み顔なることなどもありつる日頃を思ひ続けるも、流石に苦しうて、慎ましけれど…
- (二六) いとど人目の絶え果つるも、然るべき事と思ひながら、いと悲しくなむ

(二十) 所に付けては、斯かる草木の気色に従ひて、行き交う月

日の標も見ゆるこそをかしけれ

ここでの用例 a₁ すべてに、情意の形容詞が認められる。「口惜し」(三)、「怨めし」(四)、「こころづきなし」(六)、「心苦し」(七)、「うるさし」(八)、「慎まし」(一一・一二)、「苦し」(一二)、「悲し」(一六)、「をかし」(二〇)。また本用例すべてにおいて、情意の対象は、動詞連体形で表されるヒトの行為・様子(コト)であるから、「連体形で表される対象語(コト) — 情意の形容詞」に該当する。かつ、動詞連体形が条件法として解釈できることから、起因(条件節) — 感情惹起(主節)の複文と視ることができるとも示しており、「をかし」が情意のみならず評価的判断の意味を備えていると視ることができる。

(一一) 大臣の事々しく煩はしくて、何事の紛れをも見咎められむがむずかしき

この用例は「動詞連体形+格助詞が…情意の形容詞語」の文型を成す。形容詞「むずかし」は情意であるが現代語の意味「理解しにくい」「困難」は近世以降に生まれたと考証されている。¹⁴⁾

上記用例のそれぞれにおいて、形容詞述語を承ける助動詞に着目すると、「べく」(三)「べき」(四)「べけれ」(六)「なむ」(一六)「を」を確認でき、他例は接続助詞「て」あるいは零記号の辞とみてよいだろう。また、本用例中の述語形容詞について、時枝スペクトル図に従って分類してみると、β群「うるさし・慎まし・をかし」

と γ 群「口惜し・怨めし・心苦し・悲し」に分けられるだろう。 γ 群の形容詞は感情表出の強い語であるが、 β 群の形容詞は評価的な価値基準の意味を含んでいることから、 a_1 の文型には感情表出度がやや異なる二つのタイプが含まれていると視ることができるとする。

ここで参考のために、「対象語—形容詞述語」の文型の古文とその現代語訳とを対照させてみる。現代語訳において条件法として解釈される事例(二二)を一つ示しておく。

時枝用例十二(椎本三十九 姫君と贈答)

…すゞろに頼み顔なることなほありつる日ごろを思ひつゞく
るも、さすがに苦しうて、つゝましけれど

…何となく頼みにしていたこともあったこの頃を振り返ってみると、何と
いつてもつらくて、恥ずかしいのだが、…

評釈：玉上琢彌

なお、時枝の見解では、「をかし」は、「或る特殊な心の動きの働きを反省する意識の中に生まれる」[時枝 1936a: 205]であるから、 β 群の形容詞と位置づけられている。「口惜し」「怨めし」「心苦し」のように感情が前面に出る表現とは異なり緩衝された情意の表現である。根来は枕草子の事例検討から、「情意性形容詞を終止法で用いているばあい話手清少納言が『おもしろく思われる』というふうに関心を低回的に表現している」と規定し「覚ゆ」を内に含んだ「(対象)ガ…思われる」と解釈できるとしている[根来 1969: 34]。

a_2 「動詞連体形十係助詞は／も／なむ—情意の形容詞補語十動詞述語」

(二二) その事と心得て、薰「我が涙をば玉に貫かなむ」と打誦し給へる、伊勢の御も斯うこそはありけめと、をかしうも聞ゆるも、内の人は、聞き知り顔に、さし答へ給はむも慎ましうて

時枝の解釈によると、本例では三つの連体形—述語の呼応関係が認められる。(1)「打誦し給へる」—「をかしう聞ゆる」、(2)「をかしう聞ゆるも」—「さし答へ給はむも慎ましう」、(3)「さし答へ給はむも」—「慎ましう」。(1)と(2)と(3)とは部分的に重なっている。(2)と(3)の文型は a_1 と同じで情意の表現。

(二三) 宮の御文など侍るめるは、更に突まめまくしき御事ならじと侍るめると、聞ゆれば

現代語訳では、「宮のお手紙などございますようですが(ようでありますならば)、それは、まじめな御事ではあるまいと、お考えのようで」と申し上げると[玉上 1967: 319]。仮定条件と推論という判断の表現であり、形容詞「まめまめしき」は、まじめなことではないとの評価的価値基準による否定判断を表している。

(二五) 実げに然さのみ、様の物と過し給はむも、明け暮るる月日に添へても、御事をのみこそ、あたらしう心苦しう悲しきものに思ひ聞ゆるを

ここの源氏用例 a_2 では、「打誦し給へる」—「をかしう聞ゆる」(二二)、「過し給はむも」—「思ひ聞ゆる」(二五)において思

考の動詞述語+が採られており、また、「待るめる+は」―「実くしき御事ならじ」(二三)の「なる」に否定辞が付く述部を採っている。加えて、述語動詞は情意の形容詞あるいは名詞の補語(二三)を採っている。「過ちなくは」(五)、「をかしうも」(二二)、「実くしき御事」(二三)。用例(二五)においては、「思ひ聞ゆる」は情意の形容詞「心苦しう悲しき」に飾られる「もの」を補語としている。あくまで本用例の範囲においてはであるが、動詞述語は思考の語であっても感覚的な意味を含む動詞(聞ゆる・覚ゆる・思し続けらる)であつて主観的な感情に関与している(源氏物語において、ヲ格をとる「思ふ」の動詞述語の用例はまれとの報告がある¹⁶⁾)。一方、本用例において、感情の対象は、動詞連体形で表されるヒトの行為・様子(コト)であるから、「連体形で表される対象語(コト)―情意の形容詞補語+動詞述語」の文型として一括できる。かつ、動詞連体形が条件法として解釈できることから、起因(条件節)―感情的思考(主節)の複文と視ることができる。以上を約めると、用例a₂では、連体形が表す条件的事態に志向する感性的判断が表されているといえよう。

時枝は、別枠に以下の例文を設けているが、ここで検討している連体形が表す条件的事態に志向する感性的判断の表現として観ることができるとある。

(二三) いと恥かしげめなる御心どもには、聞き置き給へらむか
しと推量らるるが、妬くもいとほしくも覚ゆるにぞ

時枝の解釈は、「推量らるる」は、「妬くもいとほしくも覚ゆる」の

因であり、条件というものであるとしている。動詞述語「覚ゆる」に感情「いとほし」の連用形に係る。その意は、「推し量られるのが(推し量られると)、きまり悪くも、お気の毒にも思われるので」、「玉上 1967: 253」(括弧内は引用者の解釈)

(二四) 斯かる様の人影なさへ絶え果てむ程、とまりて思ひ給
らるる
はむ心地どもを、酌み聞え給ふも、いと胸痛う思し続け
らるる

時枝の解釈は、「酌み聞え給ふ」は、「胸痛う思し続けらる」の因であり、条件。「薫自身の想像を対象として、それに対する志向作用と解すれば、前諸例と別ものではない。」

体言格としても条件法としても解釈できる時枝引用例(二)にある箇所

∴、程の経るも、なかなか悪き事になむし侍りし

お返事が遅れば、却て面白くない事と世間ではして居ります

同じく引用例(二二)にある(前記引用例1と同文 条件法としても解釈できるとの下記指摘がある、「日頃を思ひ続ければ(続けると、続けるにつけて等)、さすがに苦しくて」

この箇所は、ある条件の下で結果として感情を覚えたという主観的情意の文と観ることができるとある。思考の語である動詞述語であっても「妬くもいとほしくも覚ゆる」(二三)「いと胸痛う思し続けられる」(二四)というように、情意の形容詞の連用形(シク活用)が動詞に係ることから、主観的な情意に関与していることは明らかである¹⁶⁾。

なお、根来によれば「をかし」連用形+動詞(覚ゆ) 述語」は、「主体が対象を放して自分から離れるように感情を表現していく」[根来 1973: 155]と規定している。この規定の再検討は、本節で検討した a 群と、次節で吟味する b 群との区別を明確にするために、さらに感情表現の諸相を概念規定していくうえでも必要となるが、今後の課題としたい。

第二節 条件法として解釈される連体形と判断の表現

時枝は言う。

体言格としてと同時に、それが条件格として解釈されるといふことは、その体言格が、対象語格であることから、当然許されることであることが分る。以上のやうな条件格の成立から、更に進んで、対象とそれに対する志向的情意或は判断の関係を越えて、ただ、事柄の因果関係、先後関係の表現に用いられるやうになつたのが次の諸例であると見ることができないであらうか。：しかし、これも「雨降れば、地固まる」のような、客観的事実の因果関係、先後関係と異なり、後者の判断(聞え承る甲斐あるべけれ)は、前者の事実(御心向けに従ひ聞ゆる様ならむ)に志向する判断として、前諸例と根本的には異なるものでないともいへそうである。」(五八論稿、太字強調は引用者)

以下には時枝が取り上げた用例を記載するが、その前に時枝の言説を吟味しておく。上記の引用中に、①対象とそれに対する志

向的情意或は判断の関係、および②事柄の因果関係、先後関係という文意の分析がある。前者①では、対象―志向的情意と対象―判断とは区別されておらず、統語的な構造がどのように異なるのかは追求されていない。

後者②は、対象と判断との関係、やや詳しくは表現主体が意識した対象の事態と、それに下した価値判断との関係を表すと整理することができる。ここで着目すべきは、後者②の文型では、対象語に対する形容詞述語ではなく、対象語に対する動詞述語の事例がいくつか取り上げられているところである。動詞述語は助動詞を伴っている事例であり、「あるべけれ」「あらざり」「侍らむ」「思す^思」「覚ゆる」「侍らず」「思し続けらる」「し侍り」などであるにもかかわらず、「客観的事な事実の叙述ばかりでなく、：話手の情意が含まつてゐる」。「客観的な事態を表現する語が、主観的な情意の表現に用ゐられる」。後の『原論』[1941: 374-375]において、「主語格と対象語格」の項において「対象語並に対象語格の設定は、必しも右の如き形容詞的述語に限らず、動詞述語についてもいひ得ることである」との知見を呈示しているが、これが妥当するかどうか、以下、用例について検証する。また、時枝の論述には不分明なところがあると思われるので、用例を整理しつつ検証する。

以下では、「動詞連体形+こそ・は・も係助詞/が格助詞」：動詞述語+判断の助動詞」の用例について検討する。

b 「動詞連体形十係助詞は／も／なむ―動詞述語」

「客観的な事態を表現する語が、主観的な情意の表現に用ゐられる」

(二四) 総角を戯れにとりなししも、心もて、「尋ばかり」の隔てにても、対面しつるとや、この君も思すらむと、いみじう恥かしければ

この例文解釈は筆者の力及ばぬところであるので、時枝のみたてをそのまま、以下に引く。「とりなししも」は、「心もて、『尋ばかり』の隔てにても、対面しつるとや、……思す」といふ判断の条件。「尋ばかり」を、催馬楽の「尋ばかりや、さかりて寝たれども、まろひ合ひにけり、か寄り合ひにけり」を踏んだとすれば、全文の意味は、「私（大君）が、薫の総角の歌を戯言にとりなしした（薫の意向を拒絶した）にも拘はらず、中の君は、私が進んで薫とともに寝をしたと思つてゐなさるだらうかと思はれて恥かしいので」となる。「総角を戯言にとりなしした」とは、中の君の判断に対する対象語の事実であり、また、その逆態的条件であると見られる。」（五八論稿、強調は引用者によるもの）。

動詞述語「思すらむと」が、下接する情意の形容詞「恥ずかし」に係っているのは、この動詞述語が表す事態が起因となつて感情を惹起させたためである。このような文脈形成も、客観的な語が主観的な情意の表現に用いられる例として、時枝において解釈されていると思われる。逆態的条件と結果との文である。

(十) 人伝に聞え侍るは、言の葉も続き侍らず

「人伝に聞え侍るは」が条件。「言の葉も続き侍らず」は結果を表している。ひとつてにお聞きになられれば、「言葉がすらすらと出て来ない」という、条件と結果の文である。言葉が続かないという外面的事実が、「客観的な事実の叙述ばかりでなく、…話手の情意が含まつてゐる」。あるいは「客観的な事態を表現する語が、主観的な情意の表現に用ゐられる」。以上、時枝の解釈である。

(二九) 一所の御蔭に隠れて、三十余年を過し侍りにければ、今はまして、野山に交り侍らむも、如何なる木の本をかは頼むべく侍らむ

「野山に交り侍らむ」もは、「如何なる木の本をかは頼むべく侍らむ」といふ判断の因。「如何なる木の本をか云々」は、前(一〇)例と同様に、情意の表現と見ることができるとしている。

条件と判断を表している文であるが、「野山に侍らむも―頼むべく侍らむ」が時枝解釈のように判断―情意の表現と言えるかどうか、これだけでははっきりしない。玉上 [1967: 280-281] の訳を以下に引く。「…宮様のお一方の御慈悲におすがりして、三十余年も送つてまいりましたので、今となつては野山にさすらい出るにしましても、どのような木の本を頼りましたらよろしいやら…」。仮定条件と判断不能（逡巡）との間の相反と解釈できるが、逡巡を情意と解釈できるかどうか、判断を保留せざるを得ない。対象語の事実志向する強調判断の表現

(五) 生まれたる家の程、掟のまゝにもてなしたらむなむ、聞耳にも、我が心地にも、過ちなくは覚ゆべき

(九) 斯様にはもてない給はで、昔の御心向けに従ひ聞え給はむ様ならむこそ、聞え承る甲斐あるべけれ

「御心向けに従ひ聞え給はむ様ならむ」こそ、は「聞え承る甲斐あるべけれ」といふの判断の条件となる事柄であり、因となる事柄である。しかし、これも「雨降れば、地固まる」のやうな、客観的事実の因果関係、先後関係と異なり、後者の判断は、前者の事実志向する判断として、前諸例と根本的には異なるものでないといへそうである。」と時枝は見立てている(五八論稿、強調は引用者によるもの)。

(二) 斯かる折の事、態とがましくもてなし、程の経るも、なかなか悪き事になむし侍りし

(二) いと好き給へる親王みなれば、斯かる人なむと聞き給ふが、猶もあらぬささびなめり

「斯かる人なむと聞き給ふ」が は、後続の「猶もあらぬささびなめり」の条件的事実と見られる。これが時枝の見立てである。

(二五) 来し方を思ひ続くるも、何の頼もしげなる世にもあらざりけれど

「来し方を思ひ続くる」も は、「何の頼もしげなる世にもあらざりけれ」といふ判断の因。と時枝は見立てている。

これら用例では、対象語側の動詞連体形が伴う助動詞および助詞と、述語動詞が伴う助動詞とから判断の表現と視ることができ。つまり、時枝の言う「主体的なものを表す辞」に着目すればよいわけである。とくに、「なむべき」(五)、「こそけれ」(九)のような係り結びつから、主観性の強い判断文と容易に判定できる。

第三節 条件法として解釈される、主節主名詞を修飾する古文連体節

連体修飾節は古文において事例を観察できる。万葉集における連体修飾についての事例も既に知られているところである[1999][稲垣2013]。連体形を名詞で承ける表現態は、古くからあり、感情表現に使われている事例もある。例えば、時枝用例(十六)「絶え果つる」という動詞が「絶え間」という抽象名詞に転換されている事例を観よう。

いと久しくなりぬるたえまを恨めしくおぼしにや

(源氏若菜下)

この文型、「連体形+抽象名詞+格助詞+情意の形容詞補語+動詞述語」においては、感情対象が状態の名詞(抽象名詞)で表わされている。これは事態を静的な状態(以下、単に静態という)としてより客観的に把握しているからである。連体形によって、対象の行為や状態そのもの(以下、動態という)を表すのではなく、対象を静態として表している。換言すれば、コトをモノとして、感情対象を直接的にはなく媒介的に表現している(なお、「おぼす」は「おもふ」の尊敬語、ヲ格をとる「おもふ」については第三章第一節および文末注16を参照のこと)。

右の媒介的表現とは異なり、対象をヒトに特定しての表現に関して、以下に「紫式部日記」から、主体を表す体言を修飾する連体形の用例をいくつか採った(底本は黒川本、表記は市古ら編1987『紫式部日記』に従う、用例番号は五一一五七とし本稿筆者

によるもの。解釈には萩谷1971を参照し、一部、市古ら編1987から古賀典子訳を引用する。和泉式部や清少納言を人物批評するくだりには以下の文例がある。

c 動詞連体形+「人」+(係助詞)―動詞述語+判断の助動詞

(五二) …わかかしこに思ひたる人、にくくもいとほしくもおぼえ侍るわざなり。

現代語訳 …自分が一番と思っている人がいるものですが、そんな人は憎らしくも気の毒にも思われることです。

古賀訳

連体節においては、「思ひ(動詞連用形)たる(完了の助動詞連体形)」が体言「人」を修飾している。主節においては、対象志向性の強い二つの情意の形容詞、その連用形「にくくもいとほしくも」の対象語であり動詞「おぼゆ」の補語と観て、「自分が一番と思っている人がいると、(その人が)憎らしく気の毒に思われる」と解釈できることから、条件―結果の推論における感性的判断の表現と視ることができ。

(五二) (1)かく、人にことならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行くすゑうたてのみ侍るは。

(2)艶になりぬる人は、いとすびうすずるなるをりも、ものあはれにすすむ、をかしきことも見すべさぬほどに、おのすからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。

現代語訳(1) こんな風に、他人とは際立見せようとむきになっている人は、

きまって(他人より)見劣りがするし、将来破なことはありませぬよ。

萩谷訳

清少納言への辛辣な批評箇所である。連体節においては、「思ひ好め(動詞已然形)・る(助動詞連体形)」が体言「人」を修飾して、これらを係り助詞「は」が承けている。主節においては、評価の名詞「見劣り」と「行くすゑうたて」とを、文末の「侍る」と感動の終助詞「は」とによって「強い語気で結んでいる」「萩谷1973: 242下」。「むきになっていれば、その人は…なのだ」という条件―推定の関係に換言可能である。この推論「…する人は…」を、強い感情の主体的表現「侍るは」が包んでいることから、感性的判断の強調表現と考えられる。

現代語訳(2) また(こんな風に) 気取る癖のついでしまった人は、ひどく殺

風景なつまらない時にも、やたら気分を出して(ちょっとした)

情緒をさえ見逃がすまいとするうちに、自然と、常識はづれの、

軽薄なひとがらにもなるにきまっています。

萩谷訳

連体節においては「なり(補助動詞連用形)・ぬる(完了の助動詞連体形)」が体言「人」を修飾して、これらを係り助詞「は」が承けている。文頭の「艶に」は「避難すべき気取った態度や情緒を表示するもの」「萩谷1973: 243上」。長い主節においては、主観的感情の語を含んだ否定的評価「さるまじくあだなるさま」を表すとともに文末の「侍る」と必然の推量助動詞「べし」とによって締めくくって「強い語気で結んでいる」「萩谷1973: 242下」。「くせがついてしまうと、人は…」なるにきまっている」という

仮定条件―推定の関係に換言できる。この推論を断定の主体的表現「侍るべし」が包んでいることから、感性的判断の強調表現と考えられる。

(五三) 我はとくすしく慣らひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、立ち居につけて、われ用意せらるるほども、その人には目とどまる。

現代語訳 「我こそは」と、妙に気取る癖がついて、態度が尊大になってしまった女房たちは（こちらもその女房の）一挙一投足におのずと気を配ることとなるので、その女房にはつい目がゆく。 萩谷訳

「くすしくならひもち」とは、奇をてらう習慣がつくことである〔荻谷 1873: 290 上〕「態度が尊大になってしまつと女房たちは」という原因と結果に解釈可能である。連体節には評価形容詞「くすし」「ことごとし」（大げさの意）があり主節は「目とどまる」で終わっていることから感性的判断の表現と考えられる。

(五四) かばかりに濁り深き世の人は、なほつらき人はつらかりぬべし。

現代語訳 これほどに深く濁つた現世の人間では、やはりつらく当たる（当然）たれば、その人はつらい目にあうのが当然です。 古賀訳

連体節にも主節にも情意の形容詞「つらし」があり文末には必然の推量助動詞「べし」があつて締めくくっている。原因と結果との関係における感性的判断と解釈可能である。

(五五) …、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめしつし…

現代語訳 おそば近くににいる女房たちが、とりとめもないお話をするのをお聞きになりながら」萩谷訳 「女房らが、おそば近くにいるときに、とりとめのない話をする、それを中宮がお聞きになりながら」

古賀訳 引例では、状況を示す事柄が連体形で表され主体を表す体言を修飾しているのであるが、「おそば近くにいるときに」という状況―事態の表現としても解釈できる。

以上の文例は文型 a₂ に近いとも言えるが、感性的判断の対象はあくまで「ヒト」である。(五五)を除き、対象志向性の強い情意の形容詞がヒトを対象として採っているが、これは西尾〔1982: 90〕の指摘通りだろう。

次に、主体を表す体言以外を修飾する連体形について、いくつか用例を採った。

(五六) いと白き庭に、月の光りあひたる、様態かたちも、をかしき様なる。

現代語訳 たいそう白々とした庭に、月光に映えている（ので）女房たちの容姿容貌も、素敵に思われることだ。 古賀訳

場面（月光下の庭）における話者の印象を表現しており、環境―帰結の関係における感性的判断の表現としても解釈できる。

(五七) …おなじさまにさうぞくきたる、様態、髪のほど、くもりなく見る

現代語訳 白一色の衣装をきているので、容姿や髪の様子が、かえってくつきりと目立って見える。 古賀訳

ある状況とその反映についての印象とにおける感性的判断の表現として解釈できる。

右の二つの用例については、連体節で表された行為や状態が、主節述部の表す行為や状態の背景としてきわめて自然であると解釈できよう。

第四章 条件法として解釈される現代連体節

第三章において論及したように、「連体形＋係／格助詞ー形容詞述語」の文型において、「動詞連体形＋係／格助詞」が体言相当で対象語であるとき、条件法としての解釈が可能であること、この事柄が時枝の研究により明らかにされた。本文型では、動詞連体形が感情の対象あるいは機縁を表すと共に、感情形容詞の述語が発話主体の主観的感情を表している。換言すれば、連体形が係り助詞「も」により総括され（連体形も）対象語格となつて形容詞述語に包摂されるといふ入れ子型構造形式である。この詞一辞の入れ子構造から、感情対象の動的属性（客観）と感情表出（主観）との関係（時枝1941: 375-377）は直接的であることが分かる。先の用例十二にあるように、平安の王朝人においては、「思ひつゝくる」（振り返る）という思考作用が、即「苦し」という感情表出に繋がっていることが感じられる。

思ひつゝくるもさずがに苦しうて
振り返つてみるのも、何といつてもつらくて、

こうした条件法として解釈される古文は、現代語においては、

動詞連体形を承ける形式名詞「の」を補つて解釈されるが、これと同じ文型をなす感情表現が汎く見いだされる。

ここで繰り返しているのもお恥ずかしい訳ですが（漱石）

といった現代文は馴染みのあるところである。こうした現代文では、動詞連体形が形式名詞に媒介されていることによつて、「こと」が抽象的実体として再表現されている。すなわち、現代語においては、形式名詞「の」により、連体形で表された感情対象の動的属性が実体化¹⁸⁾されている〔三浦1975: 79-80〕。したがつて、当然「格助詞が実体視された概念を指す語につく」〔水谷1950〕。

現代文では、抽象度の高い形式名詞で連体形を受ける形を採っている。連体形＋形式名詞＋感情形容詞述語の形態が一般化しているのである。連体形によつて、対象の動態を表すのではなく、対象を静態として表している。古文のように動態が感情を起すことという関係ではなく、形式名詞を経るの感情生起として表現しているといえよう。ただし、前章第三節において、「いと久しくなりぬるたえまを恨めしくおぼしにや」（源氏若菜下）を事例と示した古文の文型、「連体形＋抽象名詞＋格助詞＋情意の形容詞補語＋動詞述語」においては、感情対象が抽象名詞で表わされている。この例では、事態を静態としてより客観的に把握し、連体形によつて、対象の動態を表すのではなく、対象を静態として表している。入れ子型では、動詞連体形が零記号の辞（■）に総括され（連体形■）、この詞一辞を形式名詞が包摂し（連体形■の）、これらを係／格助詞が総括するという二重の入れ子になっている

〔連体形■〕の「も」。したがって、対象語と形容詞述語との関係は媒介的である。古文における感情対象の直接的な表現が、現代文では媒介的な表現として再表現されている。古典時代においては感情対象が動的属性として直接的にあらわされていたものが現代文では、動的属性を具体的に捉え返すという反省過程が介在していると言えるだろう。

連体形を直接係／格助詞が承ける形は、感情表現以外にも現代文において残っており、故事成句の「言うは易く行は難し」も、その類である。文語調の口語体、特に明治期の演説口調に残っていることも指摘されているところである。林四郎の指摘に拠れば、「新内閣の意向は、……緊縮を図るといふに在る」や「せざるを得ない」「感なきを得ない」「しかし、準体言も徐々に衰えて、やがて「の」や「こと」「もの」がこれに代わり、完全な口語文になる。これら準体言と形式名詞とは、口語の中で比較的遅れてきて発達したものであり、それだけ、極めて現代語らしい言い方だと「言うことができるだろう。」〔林 1977: 358-362〕

こうした連体形の古文から形式名詞介在の現代文への歴史的推移については、踏み込まないが、連体形用法が衰退したとの説については、「信太 1970」および「柳田 1993」の諸論稿を参看した。

第一節 「連体形＋形式名詞＋係助詞」

時枝条件法解釈の視点から、現代文における、「連体形＋形式名詞＋係／格助詞」の文型を視るとき、条件表現として解釈され

る対象語―形容詞述語／動詞述語の用例を見出すことができる。以下では、条件表現として解釈される現代文用例を検討する。用例は青空文庫のテキストから正規表現による検索により抽出した。

① 「連体形＋の＋も」―感情形容詞述語

現代文においては、時枝解釈において補われた形式名詞「の」が顕在化して「連体形＋の＋も＋感情形容詞述語」という定型を観ることができる。その事例をいくつか挙げよう。

(1) ここで繰り返しているのもお恥ずかしい訳ですが、私はその時、君などの講義をありがたがって聴く生徒がどの国にいるものかと申したのです。夏目漱石「私の個人主義」
「いうのもお恥ずかしい訳ですが」の箇所は、「連体形いう＋形式名詞＋係助詞」の文型を成す。連体形「いう」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「恥ずかしい」の対象語格として解釈できる。「いうと恥ずかしい訳ですが」「いえば恥ずかしい訳ですが」と条件表現に換言できる。

(2) ……こつちから催促するのも悪いかも知れず…

夏目漱石「こころ」

連体形「催促する」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「悪い」の対象語格として解釈可能である。「催促すると悪いかも知れない」という仮定条件表現に換言可能である。

(3) 女は入つて来ましたが、私は初対面の挨拶をするのもきまりが悪くて、『御遠慮をなさらないで、此方へ来てお掛けな

ささい。』などと云つて女を椅子に座らせてしまひました。

与謝野晶子「女が来て」

「挨拶をするのも」の箇所は、「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型を採つており、連体形「する」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「きまりがわるい」の対象語格として解釈し得る。「挨拶をするときまりがわるいので」という条件表現に換言し得る。

(4) 思いだすのも恐ろしいから。 倉田百三「俊寛」

「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型を採つており、連体形「思い出す」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「恐ろしい」の対象語格として解釈し得る。「思い出すと恐ろしい」という条件表現に換言し得る。

(5) …急に隠れたりなんぞするのも見ぐるしいから、このままこうして居りましょうと、相手の女房が云うので、その傍に女もじつと伏せていた。 堀辰雄「姨捨」

連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型を採つており、連体形「する」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「見ぐるしい」の対象語格として解釈し得る。「すれば見ぐるしい」という条件表現に換言し得る。
(6) …そのひとに迷惑をかけるのも心苦しいから、そのような誤解の起らぬよう、私の戸籍名を提供するのである。

太宰治「家庭の幸福」

「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型を採つており、連体形「かける」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「心苦しい」の対象語格として解釈し得る。「迷惑をかけると心苦しいから」という条件表現

に換言し得る。

(7) けれども君を、このままむなく帰らせるのも心苦しくて、
… 太宰治「小さいアルバム」

「帰らせるのも」の箇所は、「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型を成す。使役連体形「帰らせる」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「心苦しい」の対象語格として解釈可能である。「けれども君を、このままむなく帰らせると心苦しくて」という条件表現に換言可能である。

(8) …あなたに、あまり宿賃のお世話になるのも心苦しい事でしたので、私だけ先に、失礼して帰京いたしました。… 太宰治「風の便り」

「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型で、連体形「なる」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「心苦しい」の対象語格として解釈し得る。「お世話になれば心苦しい事」という条件表現に換言し得る。

(9) そのまま、すぐうちへ歸るのも工合ひがわるいし、彼はその足で、古本屋へむかつた。みちみち男は考へる。 太宰治「猿面冠者」

連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型を採つており、連体形「歸る」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「具合が悪い」の対象語格として解釈し得る。「歸ると具合が悪い」との条件表現に換言し得る。

(10) …このまま帰つちやうのも惜しいようだな」

宮本百合子帆「帆」

「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型で、連体形「帰つちやう」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「惜しい」の対象語格として

解釈し得る。「帰っちゃえば惜しい」という条件表現に換言し得る。

- (11) …今更、未練がましい言葉をつらねるのも気恥かしいが、…。

小酒井不木「ある自殺者の手記」

「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型で、連体形「つらねる」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「気恥かしい」の対象語格として解釈し得る。「つらねれば気恥かしい」という条件表現に換言し得る。

- (12) 今更、先生につくのも可笑しうござんすからね。

岸田国土「取引にあらず」

「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型で、連体形「つく」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「可笑しい」の対象語格として解釈し得る。「つけば可らしい」という条件表現に換言し得る。

- (13) 「連体形＋形式名詞」

どうすれば人間はもつと幸福に社会はもつと明るくなり得るだろうかを考えさせられることを選ぶのも、やむを得ないのである。 三好十郎「恐怖の季節」

連体形「選ぶ」＋形式名詞「の」による体言句が「やむを得ない」という判断の対象として解釈することが可能である。「選ぶとしてもやむを得ない」という譲歩の表現に換言可能である。

- (14) 「連体形＋形式名詞」

泣かれるのも少しなら厭とは云わない。 夏目漱石「趣味の遺伝」

「泣かれるのも」の箇所は、「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型を採用している。逆態条件節＋仮定条件句＋主節の文構成と視るならば、「泣

かれても…いやとは云わない」という逆態条件の表現に言換えが出来る。

- (15) 私は、実は、非常にうれしい——うれしいと言うのも、変

なものですが

三好十郎「おりき」

「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型で、連体形「言う」＋形式名詞「の」による体言句が感情形容詞「変なものですよ」という判断「の」の対象語格として解釈し得る。「言うとすれば／言えは変なものですよ」という条件表現に換言し得る。

以上の用例 1～15 においては、「連体形＋形式名詞」は「条件法」として解釈され、感情形容詞述語に対する関係は、**条件、逆態条件**であると観察できる。それぞれの用例について、条件法への換言ができるならば、連体形が主節述部に連用節として係ると視ることが許される。

第二節 条件法として解釈される、主節主格を修飾する連体節

古文の表現では連体形が二重の用法を備えていたのであった。こうした多重用法が現代文において連体修飾の用法が多様であることの歴史的背景としてあるであろう。第三章第三節において例述したように、古文において、「連体形＋係／格助詞」と並行して、連体形が名詞を修飾する表現態が条件法として解釈される事例があることが確認された。こうしたことを、歴史的背景と考えるならば、「連体形＋「の」＋係／格助詞」の形態から「連体形＋名詞＋係／格助詞」の形態への類推により、後者の表現態が条件表

現として用いられる可能性を想定できるだろう。

現代文においては、主節・主格に係る連体修飾が多用されている。そのなかには、連体修飾節が、主節述部に、統語的には係わらないが意味的には関わる場合がある。例文を観てみる。

入場券をお持ちでない方はこちらにお並びください。

連体節を、「入場券をお持ちでないときは、(その方は)こちらにお並びください」という連用節に言い換え可能である。連体表現と連用表現とは意味的には等価であり、連用節と主節との意味的不整合は認められない。もちろん、視点の差異は認められる。連体表現では「方」という実体を限定することで話者の立場が優先されているが、連用表現の方では、聞き手側の条件を提示することで聞き手の立場が尊重されている。

上に観たように条件法に解釈される古文連体形の用法は、現代語の表現にも受け継がれていると思われるが、現代文において、意識的に、連用節的な連体節を用いているとは言えないだろう。無自覚的に連用的連体節を運用していることが、連体節を一律に関係節か同格節に英訳をする傾向を助長する一因であろうと推定される。

松本清張『点と線』から連体修飾の事例をいくつか採りあげる。

(16) そうそう石田部長のため一役買い、安田辰郎の片棒をかついだ佐々木喜太郎という事務官は、課長になりましたよ。

「…の片棒をかついだことで、…」という原因の連用節に言い換えることができる。

(17) まさか佐山を殺すためとは知らない石田部長は、彼を自殺に追いこむ工作とばかりに思いこみ、

「…知らないから、…」という理由の連用節に言い換えることができる。

(18) その後「佐山が青酸カリで女と自殺した」と知ったときの石田部長は、さすがに顔色が蒼くなつたでしょう。

「…知つたときには、…」という時間的継起の連用節に言い換えることができる。

花村萬月『父の文章教室』から一つ採りあげる。

(19) あなたは自分の父親が好きですか。好き、と答えることのできたあなたは、この文章を読む必要がないかもしれませ

ん。
「…答えることができたなら、…」という条件の連用節に言い換えることができる。

16～19の用例について、まとめると、連体節が、主節との関係において、条件・原因・理由・時間的継起の意味を表している。

第三節 連体節の文体的特質

表現者は、連体節として叙述した事柄を実体的に捉え返して概括する。事柄概括の抽象レベルに応じて、実体を、固有名詞・形式名詞などを主名詞として選択的に採りあげて再び表現する。連体節が主名詞を修飾すると視ると同時に、表現主体の側からは、連体節を主名詞が包摂すると視るのである。『原論』の表現に倣うならば、詞(主名詞)が連体節とその零記号の辞とを包摂する。

主体を囲む環境や主体が抱える事情を連体節で表現すれば、場面における主体行為の自然な展開を表すことができる。主節主格を修飾する連体節は、この自然な成り行きを表現するための優れた表現態であると評価できる。連続あるいは平行する行為を、連体節―主節で表せば、主体において一体化する。ここで漱石作品から一文を引く。

(20) ○ 天から降ったように、静かに立っていた糸子はゆるやかに頭を下げた。

△ 天から降ったように、静かに立ちながら糸子はゆるやかに頭を下げた。

夏目漱石「虞美人草」原文は○印の方に、夏目漱石「虞美人草」原文は○印の方に、描くだろう。読者は論理が先に立たず自然な流れを感じるだろう。しかし、連用節では興醒めである。論理が顕在化して角が立つからである。まさに「智に先立てば角が立つ」。同時に、環境や事情に主体が溶け込んでいるので主客不分明になりやすい。連体節と主節との、論理的関係や前後関係が不明瞭になる傾向がある。主節が長くなり、さらに連用節が後続するようになると文脈の読み取りが難しくなる。ただし、長くあっても主節が簡潔ならば、読解が容易である。たとえば、同じく漱石の作品一文を示す。

(21) 「静かなものに封じ込められた美禰子はまったく動かない。」

漱石「三四郎」

長い連体節が簡潔な主節によって文が収斂している。

同様の観点から、芥川の文章（『影』）を採り上げる。

(22) (1)：電燈を消した二階の寝室には、かすかな香水のにおいのする薄暗がりか拡がっている。(2)ただ窓掛けを引かない窓だけが、ぼんやり明るんで見えるのは、月が出ているからに違いない。(3)現にその光を浴びた房子は、独り窓の側に佇みながら、眼の下の松林を眺めている。

三つの文は、みな連体節と主節とを備えており、文を繋ぐ接続詞はないが、その代わり文頭に前文を引き継ぐ副詞（「ただ」「現に」）が置かれている。最初の二つは主体を取り巻く環境的状况（薄暗がりの寝室と窓から入る月明かり）を描き、それら状況を、三つ目の文の連体節にて収斂する形で（「その光を浴びた」）、主体（房子）の背景として描きつつ、主体の行為が描かれている。三文の流れが自然であり映像喚起力もあるといえそうである。

ここで観た連体節と類似する文体効果のある英文について、若干検討しておこう。結論を急ぐが、英文では、事態の成り行きとして表すには分詞構文が適切である。というのは、従属接続詞を用いると論理関係が先立つからで、分詞構文には連体節との類縁性があると見立てた方が良さそうである。詳細な検討は今後の課題とせざるを得ないが、一例だけ紹介しておこう。

アーネスト・ヘミングウェイは、主人公が鱒釣りの後に丸太に腰掛けて一息ついているところを描いている [Hemingway 1925: *The End of Something*]。この箇所の英文は累積文 cumulative

sentence と呼ばれている [Kane 1983: 240]。この累積文では、主節に続いて、次々と分詞構文の叙述が続き、主節より重要になる。やむに技巧が凝らなれ、文頭の *sat on the logs* から、後半の *smooth to sit on* に回帰する構造が採られている。

(23) He sat on the logs, smoking, drying in the sun, the sun warm on his back, the river shallow ahead entering the woods, curving into the woods, shallows, light glittering, big water-smooth rocks, cedars along the bank and white birches, the logs warm in the sun, smooth to sit on, without bark, gray to the touch: slowly the feeling of disappointment left him. It went away slowly, the feeling of disappointment that came sharply after the thrill that made his shoulders ache. It was all right now.

「ニツクは丸太に腰掛けたばこを吸った。日で服を乾すと日の温もりが背中に感じられる。浅瀬の先は森へ入り曲がりながら奥へと流れていき、浅瀬には光が煌めき、水が大きな岩を洗って滑らかに流れ、土手に沿って杉が、白樺も見える。丸太は日にあたって暖かく、皮をはいであるので、つづつでなく座るのに好く、体に触れるところは灰色だ。ゆっくりと失望感が抜けていくのが分かった。その落胆はだんだん消えていった、失望感は興奮したあとに急にやってきて肩が痛かったのだ。今はもう大丈夫だ。」

試訳

右の試訳は原文の構文に沿ったものであるが、連体節を適度に用いて改訳してみよう。

「丸太に腰掛けたニツクはたばこを吸った、日で服を乾すと日の温もりが背中に感じられる。森へと入り曲がりながら奥へ流れていく浅瀬の先。その浅瀬には光が煌めき、水が大きな岩を洗って滑らかに流れていく、土手の杉、白樺が見える、日にあたって暖かい丸太は皮をはいであるのでつづつでなく座るのに好く、体に触れるところは灰色だ。ゆっくりと失望の感じが抜けていくのが分かった。だんだん消えていくその失望感は、興奮したあとに急にやってきて肩が痛かったのだ。今はもう大丈夫だ。」

翻訳調と感じられる連用中止の連続が、連体節が入ることで改善されているのではないだろうか。ヘミングウェイによる流れるような光景描写に、より近づいているといえないだろうか。連体節の文体的特質について、次の見解が参考になる。「もつと長い修飾語句が、短い名詞に吸収されては先へ進む表現法に長所がないわけではない。文章に一種のしまりを与える効果があると言えうに思う。」[渡辺実 1963]

原文では、遠景から近景へ、そして上手から下手へと風景を背景に、ニツクの心の安らぎを写し出すように文が展開されている。このような絵画的な描写はイメージの流れの表現であるから、従属接続詞や接続副詞により文を繋ぐ手法では実現できない。*since* (のゆえに) や *although* (にもかかわらず) や *consequently*

(したがって) などという言葉は、事柄を論理的に分節するからである。

芸術家は、全体を部分に分解せず全体として描く。例えば、対象を描写するときに、カメラが遠景から近景へと写すように情景を、あるいは対象の動的構造を直感し、そのダイナミズムを描く。したがって、多くの作家は、まず情景の概観から書き出し細部への描写に移る。細部の描写は、従属接続詞を極端に避け、流れるが如くに文を展開することになる。こうした文章展開は、直列文 (Serial Sentences) といわれ、and の繋ぎを特色とする freight-train sentences や分詞構文などで繋ぐ長い cumulative sentences などによる文体が知られている [Kane 1983: 229-242]。ヘミングウェイはこの種の文体の匠である。

一方、従属接続詞や接続副詞による叙述では、論理が先立ってしまつたため流れを分断する。部分を単なる部分に墮落させ部分の機械的結合と感じられるからだろう。こうした文章から映像は喚起されない。

事実に語らせるという叙述法は、単に事実をありのままに記述するというのではない。観念的に再構成された全体がすでにあり、これを前提にして、創造行為として対象を表現 (express) するのであるから、事実の羅列ではない。芸術家が出来事・状況・人物を生き活きと描くことができるのは、作品を完成する前に、芸術的全体として観念の中に表現対象を再構築 (re-present) しているからである。対象を観念の中に取り込み、観念の中に映像

の形で保有しているからである。こうした作家の翻訳には、連体節を生かした翻訳が有効となるだろう。

第四節 英語従属節を連体節へ翻訳する手法

英語の関係代名詞節においては、関係代名詞が主格あるいは対格を示すことは明確ではあるが、主節との論理的関係を明示していない。一方、従属接続節においては、主節との論理関係を接続詞が明示している。Ⅰ(仮定条件節・when 時あるいは確定条件節・although 譲歩節など)においては、接続詞が論理範疇を表している。

英語従属接続節は、主節の述部を副詞的に修飾すると視て、主節と連用節との複文に和訳することができる。「ので・から」の理由表現、「れば・たら」の仮定条件、「けれども」の相反表現などは、文体上、主節と連用節との関係が明示的に表現され論理性が顕在化している。そのため、文体的には、いわば固い印象がもたれやすいと思われる。そこで、連用的に訳すのではなく、主節の主格を修飾する連体節として訳出すると、主格が人間主体を表しているときには、とくに、文の流れがなめらかに感じられ自然な表現として読み手に受け入れられやすいと思われる。

連用節と主節との論理的な関係性が二つの節に分けられる訳文では、連用節の行為や状態と主節のそれとは分離された上で結合されている。そうではなく、主節主格によって連体節が包摂されることにより、連体節の行為や状態と主節のそれとは統一される

といえる。そのため、連体節から主節へと事柄が自然に展開されるのである。実際、翻訳家の中村保男は次のように指摘する。

「『〜している時に』を意味する *as* は、少し表現を変えて『〜している時の』と形容詞的に訳したほうが文全体の流れがなめらかなる場合もある。」[中村ら 1984: 262]

「接続詞を関係代名詞に転換して訳すわけだが、この手は何も *as* に限った話ではなく、*when* や *after*、*while* などについてもあてはまる。とりわけ、副詞節が長いために直訳したのでは文全体の流れが悪いときに使うと効果的だが、ほかに、上の例のように、接続詞を挟んだ二つの主語のうち、一つが所有格を含む場合にはしっくりすることが多い。」[ibid.]

以下には、従属接続節と主節との主語が同一あるいは部分と全体との関係である英文とその和訳文とを、採り上げる。英米の文学やジャーナリズム、そして日本の翻訳論などの諸作品から用例を引用する（従属接続節の強調は引用者によるもの）。

① *when* などの時間節を、主格を修飾する連体節に翻訳

(31) I found him there when I was sent to fetch him for dinner, smiling slightly, just this head showing, his face turned up to the spring rain. Canin, E. 1991. *Blue River*.

晩御飯に呼びにいかされた僕は、そんな姿の兄を見つけた
— かすかに笑みを浮かべた、頭だけ出して、顔を春の雨に
向けて上げている兄を。

『英米小説演習』 研究社 1998 訳：柴田元幸

(32) When her face relaxed, she was lovely in a sort of different way.

顔から緊張のほぐれた女は、さつきとはまた別の意味で愛
らしかった。

英和翻訳辞典 中村保男編

(33) All seducers and reformers are responsible: Lady Bessborough when she lied to Lord Granville; Miss Davies when she told the truth to Mr. Greg. Woolf, V. 1929

責任は、あらゆる誘惑者、あらゆる改革家にあるのだ。心
にもないことをグランヴィル卿に言ったベズブラー夫人の
ごときも、グレッグ氏に真実を吐露したデイヴィス女史の
ごときも、そうである。 訳：西川正身・安藤一郎 1952
あらゆる誘惑者とあらゆる改革家に責任があるのです。グ
ランヴィル卿に嘘をついたベズブラー伯夫人に、グレッグ
氏に真実を告げたミス・デイヴィスに、責任があるのです。

訳：川本静子 1988

あらゆる誘惑者とあらゆる改革家に責任があるのです。グ
ランヴィル卿に嘘をついたベズバラ伯爵夫人にも、グレッ
グ氏に真実を述べたミス・デイヴィスにも責任があるの
です。 訳：片山亜紀 2015

ヴァージニア・ウルフの評論 *A Room of One's Own* には右三つの訳
書があるが、すべて *when* 従属節を主体を修飾する連体節に和訳して
いる。刊行順に引用した。

(35) Then I realized he was the young guy who found me in the hall after I'd been bashed in the head

そこでやっと気がついた。こいつは、頭をぶん殴られた私を廊下で見つけてくれたあの若者だ。 英和翻訳辞典

関係代名詞節において、主動詞 find の目的語 me を修飾するよう after 節を連体節として翻訳して go。

(35) Kate poured a glass of juice, and while she drank it, Ray ran his arms round her waist and nuzzled into the back of her neck.

ケイトはコップにジュースをついだ。コップを傾けているケイトの腰にレイは、両手をまわしうなじに鼻をすりつけた。 英和翻訳辞典

while 節の主語 (she) が指す主体 (Kate) の身体部分 (her waist, the back of her neck) が、主節動詞 (run, nuzzle) に係る前置詞句の目的語となり、while の節を、身体部分に係る連体節として訳して go。

① as 時間節を連体節に和訳

同じ主体の二つの行為が連続あるいは平行しているとき、英語原文通りに訳すと、二股に裂かれてしまう。これをアシモフ『三ククの決死圏』の翻訳者である高橋は「双頭の蛇」という「高橋泰邦 1982: 145」。二つの行為は一つの主体において連続あるいは統一されているのだから、連用節—主節に訳出するのではなく連体節—主節に訳出すべき、という指摘である【別宮 1983: 99】。

(36) "The Emperor is dead!" His face was working with agony as he spoke so.

そう言う彼の顔が苦悶にひきつっていた。 訳：高橋泰邦

(37) LeAnn Gwynne's eyes widened as she looked at me. I saw fear in her.

私を凝視するリアン・グウインの目が大きく見開かれた。不安の色がにじんで go。 英和翻訳辞典

(38) Behind Mrs. O'Brian, as he lifted his eye's Mr. Ramirez saw the long table laid with clean white linen ...

Bradbury, R. *I See You Never*.

オブライアン夫人の後ろには、顔をあげたラミリーズさんの目に、長いテーブルが見えた。 訳：岩垣守彦

(39) Victor didn't see it as he pulled the door closed behind him. He thought with satisfaction about the look in his father's eyes as he was being shaved.

McNamee, E. 1994. *Resurrection Man*.

車の姿は、うしろ手にドアを引いて閉めるヴィクターの目には入らなかった。髭を剃ってもらっている父の目に浮かぶ表情を、かれは満足感とともに思い浮かべた。

訳：柴田元幸

(40) The whole British empire creaked and groaned as it moved to find new ways of dealing with Gandhi.

ガンジーへの新たな対応を模索する大英帝国は、総身をよ

ひらけて苦悶の声を上げた。

訳：別宮貞徳

(41) Marino's face was expressionless as he glanced at me.

私にちらりと目を向けたマリーノの顔は、無表情なままだ。

P. D. Cornwall. 1991. *Post-Mortems* 〔検死官〕 訳：相原真理子

「私をちらりと見たとき」という連用節に代えて連体節を採用して
る。

(42) His eyes were flat as they fixed on me.

私をじっと見つめる目には、何の感情も表れていない。

Ibid.

「私をじっと見つめるとき」という連用節に代えて連体節を採用して
る。

(43) You may see her now, as she walks down the favourite
turning, and enters the Deeps by a narrow path through
a group of Scotch firs. ...

Eliot, G. 1860. *The Mill on the Floss*.

今、歩みなれた道のまがりめをおりて、銀松のむら立せの
なかに通う小径を谷間へはらうて行く、彼女の姿が、読
者に見えるまで。

訳：工藤好美・淀川郁子

長ら as 節 (as she walks down... a group of Scotch firs) の訳を「彼
女の姿」に係る連体節として翻訳してる。

(44) For some time as he walked Nick had been in sight of one
of the big islands of pine standing out above the rolling
high ground he was crossing.

E. Hemingway. 1929. *In our time*.

歩いてくるニックの眼に、いま横切っている起伏した臺地
のうえに、島のように浮き出している大きな松林の一つが
しばらくのあいだ見えていた。

『われらの時代に』 訳：高橋正雄

従属接続節 (as he walked) を、主節の主語 *Nick* に係る連体
節として翻訳してる。

以上の対訳用例では、①従属接続節と主節との主語が同一主体を
指す同じである場合 (31・33・34・35・38・39・40・44)、②従
属接続節の主語を、主節の *see* などの動詞目的語が指す場合 (43)、
③主節の主語が主体の身体部分 (face や eyes など) を示してい
る場合 (36・37・41・42) もしくはその逆の場合 (主節の主語が)
(32) を採り上げた。

③ as 状態の節を連体節に和訳

(45) For about a couple of minutes I stopped thinking about
bombs and began thinking about my figure as I'd studied
it in my bath that morning.

Orwell, G. 1939 *Coming up for air*.

二分間くらい、私は爆弾のことを考えるのをやめ、今朝家
のバスでためつすがめつして見た自分の姿のことを考えは
じめた。

『空気をもちめて』 訳：小林歳雄

ちよつとの間だけ、わたしは爆弾のことを考えていた思考
回路を転じて、今朝方の自分の家の風呂場で認識を新たに

した自分の体型を思いやっていた。

『空気をもとめて』訳：大石健太郎

- (46) The vocabulary of Old English, as it survives for us today, contains some thirty thousand word, ...

今日残っている古代英語の語数はほぼ三万。

Sheard, J. A. 1954. *Words We Use*.

訳：別宮貞徳

④ If/when 条件節を連体節に和訳

- オーウェルの短編「象を撃つ」に連体修飾を用いた訳文がある。
原文は条件節である。

- (47) If a man cannot enjoy the return of spring, why should he be happy in a labour-saving Utopia?

春がめぐってくるのも楽しめない人は、どうして労働節約の
ユートピアで幸福になれるだろうか。

George Orwell Urban Foible? Collected Essays SOME

THOUGHTS ON THE COMMON TOAD 1946

訳：小野恭一

制限関係代名詞節を条件法に解釈して連体節に翻訳している。

- (48) We're leaving at 8:00 o'clock. If anyone is late, it's just too bad. We will leave without them.

8時に出発します。遅れた人は、気の毒ですが置いていきます。
英和イディオム完全対訳辞典

- (49) When a man is investing, he wants the best advice that

money can buy.

投資する人は金で買える最高のアドバイスを求めている。

Ibid.

⑤ 分詞構文を連体節に和訳

- (50) Determined to have their weed and smoke it too, many tobacco aficionados have been switching to low-tar, low-nicotine cigarettes.

愛用の葉と煙は絶やすものかと一大決心をした多くのタバコ狂いは、低タール、低ニコチンのシガレットに宗旨変えした。
現代米語コーパス辞典

- (51) As the end, having fought off one devil, Tom gazes at the other — a TV screen — with fellow mental patients.

TME 1982 June 7

終わりに、ようやく一つの悪魔を払いのけたトムは、同僚の精神病患者たちとともに、また次の悪魔を見つめる——こ
んパTVだ。
現代米語慣用句コーパス辞典

- (52) Left to its own devices, the State Department machinery tends toward inertia rather than creativity...

TIME 1982 March 15

独善のままに放置された国務省のメカニズムは、創造性よりは惰性に陥る傾きがある。

現代米語慣用句コーパス辞典

- (53) Eschewing the pinstripe ambiguities of the career

professional. Habib is renowned for his straightforward talk and capacity to cut through to basics.

TIME 1982 July 19

職業外交官にありがちの洗練された曖昧さを嫌うハビブは、その直截な話しぶりと基礎的事実に切り込む能力で名声がある。現代米語慣用句コーパス辞典

こいで動詞に対する修飾句が連体節に翻訳される例文を示す。

- (54) Great numbers of adult English people never in their lives bothered to vote in an election.

成人で一生選挙に投票したことのないような人がいくらかもいる。Orwell, G. 「イギリス人の道徳観」 訳：小野協一

- (55) (1) Extremely few English people are afraid to utter their political opinions in public. (2) and there are not even very many who want to silence the opinions of others.

(1) 自己の政治的意見を公然と発表することを恐れるようなイギリス人はごく稀であって、(2) 他人の意見の発表をおしつちぎろうとするような人だつてさう多くはない。

Orwell, G. 「イギリス人の道徳観」 訳：小野協一
英語単文 (SVM 文型の VM を、連体節を伴う主部に翻訳した例。

「極、少数の人が、自分の政治的な意見をおおむらに言うのを、恐れる」と訳出できるが、to utter... という事柄が主述の間に埋め込まれることで客観的な事態を utter についての主観的判断を主体的に表

す be afraid。これらの英語重文においては、先の文は断定文であり、後の文は関係代名詞節を伴う存在文で表現されている。英文の作者は、前文では be 繫辞によつて主体的に断定を示し、後文では be 存在動詞によつて客観的に事実を示したと考えられる。訳文では、両方とも連体修飾の形を採っていることから、区別的に訳出すべきところと思われる。

- (56) His plan was to come upon Vicksburg from behind. ...

背後からヴィックスバーグの街を攻める作戦であつた

Dixon, R. J. Fox, H. 1975. *The USA: Man and History*.

訳：巻下吉夫

- (57) Many people saw the suspect do it, but none were willing to bear witness.

容疑者がそれをやることをたくさんの人が見たが、進んで証言する人はだれもいなかった。

英和イデオム完全対訳辞典

右の和訳手法と関連する英訳手法については、第五章第三節第三項「連体節 + 人 / 者」が / も」いる / 多い」の文型の英訳を参看されたい。

本節において詳しく検討したように、(A) 英日翻訳において、(a₁) 従属接続節を連体節に和訳する手法が適切であることが認められる。なお、(a₂) 限定用法の英語関係節を条件節に解釈し連用節に和訳してもよい事例があること、これについては次章で触れる。

第五章

連体節の英訳手法

— 主節主格を修飾する事例を中心に —

連体節を英語関係節に翻訳すると非文になる場合が多く観察され、特に「先行詞が特定な唯一の人・物・事の場合」、分詞構文や従属接続詞の節として英訳すべきことを、「岩垣 2003」が提案している。たとえば、次の連体節の英訳は分詞構文が適切であるという。

(58) 三年ばかりニューヨークで暮らした私には、国際人になるということがどんなに大変なことかよくわかる。

Having once lived for three years or so in New York, I know very well how difficult it is to become an internationally minded person.

この提案に踏まえるならば、ある種の連体節は、非関係節の従属節や分詞構文の文型を採用して英訳するという方向が検討課題となる。

ところで、英語においては、非制限用法の関係代名詞節には、原因や理由の副詞的機能があり、制限用法の関係代名詞節には、条件的な関係を表す事例があると指摘されている（詳細は文末注の補節二を参照）。たとえば、

(59) Students *who work hard* pass their exams.

一生懸命に勉強する学生は、試験に通る。

(60) If students work hard, they pass their exams.

一生懸命に勉強すれば、学生は試験に通る。

この英文事例のように関係代名詞節の述部と主節述部とは、統語的には係わりがないが意味的には関わりがあり、このとき前者と後者との間で相互に換言が可能である（前者の方が英語母語者には達意に思われるが、後者は論理が際立つと感じられるようである²⁴）。具体的には、制限関係代名詞節を条件の従属接続詞節に換言できれば、前者と後者との相互換言が可能であり、また非制限関係代名詞節を理由の従属接続詞節に換言できれば、両者間で相互換言が可能である。一方、日本語においては、連体節から連用節への換言が可能である。これらの事柄から、(β) 日英翻訳において、(β₁) 連体節を関係代名詞節に翻訳する手法の他に、(β₂) 連体節を従属接続詞節に翻訳する手法の可能性が潜在しているといえそうである。ここでは、後者(β₂)の手法について検討する。

第一節 連体節を連用節に換言可能な場合の英訳過程

第一項 連体節の連用節への換言

益岡は、形式は装定（主名詞を飾る）だが内容は述定（主節に述部に係る）という性格を持った連体節について、次の事柄を指摘した〔益岡 1997: 167-180〕。

①主節の表す事態に対して情報付加する連体節については、その付加内容には、「対比・逆接」「継起」「原因・理由」「付帯状況」がある

② これら連体節表現は意味内容から言えば述定として機能している
る

③ これら連体節表現は連用節へのパラフレーズが可能

益岡の上記の知見は、南不二男の「くテ」の分析や仁田による「シテ形接続」の意味分類に符合する。南は、連体節に現れる従属句について、「A B のものは連体修飾の一部となることが可能である。C D のものは原則として連体修飾語の一部となることが出来なく」と指摘した [南 1993: 78-86]。

「白井ら 1995」は、南の分類を適用して係り受けの分析を進めた以下の知見を提出した。

A 中止性の強い述語ほど遠くに係る傾向があると推定されるから、次のヒューリスティックスを導入する。

① 連用節述語のうち、中止性の強い B 類の述語は、他の連用節述語を飛び越える。逆に、他の述語は、次に現れた連用節述語に係る。

② 連用形の単独型は、他の連用形の単独型を飛び越えないで、それに係る。

B 動作性の強い述語は、動作性の弱い述語を飛び越し、動作性の弱い述語は、動作性の強い述語に係る。

以上の知見に基づいて以下の仮説が提案されている [佐良木・新田 2008]。

連体節を連用節／シテ形に換言可能であるとき、連体節の英訳は、関係節ではなく、従属節・分詞構文が適切である。

連体節を連用節に換言したとき、右の係り受け規則が保持されるかどうか、例文を一つあげて検証する。

連体節

旧モデルは五インチの F D 二台分のドライブを装備していただけだったが、これに加えて大容量の H D D を内部に組み込んだ今回のモデルは、アクセス時間を短縮し、記憶容量に余裕を持たせた。

連用節への換言 I

旧モデルは五インチの F D 二台分のドライブを装備していただけだったが、(C 類・読点) 今回のモデルはこれに加えて (B 類) 大容量の H D D を内部に組み込んでいるので、(B 類・読点・強中止性) アクセス時間を短縮し、(B 類・読点) 記憶容量に余裕を持たせた。

連用節への換言 II

旧モデルは五インチの F D 二台分のドライブを装備していただけだったが、(C 類・読点) 今回のモデルはこれに加えて (B 類) 大容量の H D D を内部に組み込んで、(B 類・読点・弱中止性) アクセス時間を短縮し、(B 類・読点) 記憶容量に余裕を持たせた。

換言 I では、「組み込んでいるので、」の従属句は B 類・読点・強中止性であることから、「短縮し」を飛び越して文末の「持たせた」に係る。換言 II では、「組み込んで、」の従属句は B 類・読点・弱中止性であることから、「短縮し」に係る。したがって、連体節

は連用節 I への換言が適切である。本例では、連体節を連用節に換言したとき、係り受け関係が元の文と変わりが無いことを示したが、複数の連用節を備える長文において、連体節の連用節への換言が一般的妥当性があるか否かの検証は今後の課題とする。

第二項 連体節の英語従属接続節への翻訳手法

第四章第四節において言及したように（従属接続節を連体節に和訳する手法）、英文和訳において、ある種の英文従属節を、連用節ではなく主節主格に係る連体節に訳出する手法がある。連体節による訳文は、連用節による訳文に比べて、自然な和文であった。それは連体節が備える文体的特質によるものであることも前章において論じた。以上の知見に踏まえて和文英訳において、ある種の連体節は従属節に翻訳する手法が確立できると考える。すなわち、連体節を連用節／シテ節に換言可能なとき、その換言によつて連体節と主節との論理関係を範疇で表現することができると。このときは、連体節の英訳は関係代名詞節ではなく分詞構文・従属節が適切である。ただし、関係節も適切である場合もある。その理由は、「Quirkら1985」によれば、英語関係代名詞節は、いわゆる制限用法の場合は、条件の従属節に換言でき、非制限用法の場合は理由の従属節に換言できるからである（詳細は文末の補節二を参照⁽²⁾）。

以下、和文英訳の実例を採取することで、本稿で提案する英訳手法を検証する。

第二節 「連体形＋形式名詞＋係助詞」の文型とその英訳

現代語においては、時枝解釈において補った形式名詞「の」が常態化して「連体形＋」の「＋係助詞、主節」という定型が創出されている。現代語においても「対象とそれに対する志向的情意或は判断の関係を越えて、ただ、事柄の因果関係、先後関係の表現」（五八論稿）に拡張されている、以下、英訳例との対訳の形で用例を示す。対訳例文は文芸作品を中心に取り上げた。

まず、感情形容詞を述語とする感情表現の英訳に触れる。本稿第四章第一節では、連体形と形式名詞と感情形容詞の述語との文型が条件法に換言できることを観た。この種の感情表現の英訳事例をいくつか挙げる。

①「連体形＋形式名詞の＋係助詞も」―感情の形容詞・名詞述語
漱石作品『こゝろ』とその英訳を中心に事例を採り上げよう。

(61) (a) いたい事があるのに、いわないで死ぬのも残念だろうし、(b) といって、こつちから催促するのも悪いかも知れず。

(a) Of course, if he did have anything on his mind, it would be a pity to let him die without telling us about it. (b) On the other hand, perhaps it would be wrong of us to bring up the subject. McClellan, E. (Trans.)

「残念だろうし」の述部は、「感情名詞＋推量の助動詞」という構成であり、「催促するのも悪いかも知れず」の述部は、「感情形容詞述語」＋「二つの係助詞か・も＋知れない」という話者の不確かな判断を表

す構成である（形容詞「悪い」の意味を「すまない」という意味に解釈した²³）。ときに感情表現といえる。やや詳しくは、本用例は、「言わないで死ねば」「催促すれば」という条件法に換言可能であり、そのような想定行為を機縁として（条件）、相手の心情を話者が想う「残念だろう」（主節）ことを、あるいは話者に「（相手に対して）悪い」という感情が起るだろうことを表している。場面における話者の内的・自省的な感情の表現（第二章第二節で言及した）といえるだろう。対応する英訳文では、(a) Ⅱ 従属接続節と話者の主体的表現である助動詞 *would* を備える主節という仮定法をとっている。この英文では、Ⅱ という抽象的主語を建てて感情を表しているが、ポリンシヤによると、やや婉曲な表現である [ポリンシヤ 1981:262,293]（詳しくは文末注を参照²⁴）。感情の形容詞 *pity/wrong* の表現であり、感情の対象は、*to* 不定詞という形に英訳されている。

(62) わが家に取り残すのもまた甚だしい不安であった。

The thought, therefore, of my mother living in solitude in
the big house gave him considerable anxiety.

McClellan, E. (Trans.)

「取り残せば」あるいは「取り残すということを考えると」という条件節に言い換えができる。感情名詞述語文が、英文では因果関係を表す他動詞構文に「〜という考えが（と考えること）不安を与える」翻訳されている。

次は、評価的判断の形容詞述語の事例である。

(63) 私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のため

に好し悪しだと考えていた。 漱石「こころ」

I was not so sure that to force my father to consider such
a matter at this stage would be right.

McClellan, E. (Trans.)

「そんな事を持ち出せば」という条件法に換言可能である。その条件法は英文では、*to* 不定詞の名詞用法と *would* とによる仮定法で表現され、「良し悪しだと考えていた」という態度を決めかねている心境は *not so sure that-clause* の構文により表されている。

㊦「連体形＋形式名詞の＋係助詞は」——感情の形容詞・名詞述語

(64) そう思われるのは身を切られるより辛いんだから。

The thought that you might secretly think me responsible
is unbearable. 漱石「こころ」

McClellan, E. (Trans.)

「連体形＋の＋は」感情形容詞述語の文型による話者の感情の表現である英訳文もまた「The thought ... is 形容詞」の文型。

(65) ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げつくれば、
いじましたとわやわや断つて奥さんの前へ置いた。

漱石「こころ」

I thought it might seem odd to produce the mushrooms
without some explanation, so as I put them down in front
of Sensei's wife, I carefully explained that my mother had
wished me to present them to her and Sensei.

McClellan, E. (Trans.)

「連体形+の+は「感情名詞述語」の文型による感情の表現である。」「ただ出すのは少し変」は「ただに出せば少し変に想われるだろう」に換言できる。「変」は「奇妙な」「異常な」という心理を表すと解釈して広く感情名詞述語とした。mightの仮定法が採られている。ここでの仮定条件「ただ出す」は without による前置詞句で表されている。odd という形容詞により感情が表されているが、感情と評価との入り交じった心理を表していることから、odd の語感には「変」にかなり近いと思われる。

次に、判断の表現について事例を挙げる。

- (66) 静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえって家を持つ面倒がなくなって結構だろうと考え出したのです。

漱石「こゝろ」

After all, I thought to myself, living as the only paying guest in a quiet household would probably be more convenient than having a house of one's own.

McClellan, E. (Trans.)

「連体形する+形式名詞の+係助詞は」の文型を成し、連体修飾節は判断の対象である仮想の事態を表し主節は判断を表すと解釈できよう。それゆえ、連体修飾節を、条件法として解釈でき「一人で下宿してるとすれば、かえって…結構だろう」に換言可能である。この英訳例では、仮定法が採られている。

- (67) 「ホストクラブでアルバイトするのは個人の自由でしょ」「いや、それは会社全体のイメージにかかわる問題だ」

It's entirely my own business if I want to work at a host bar after hours. I'm afraid not. It's something that can affect the image of the whole company.

最新日米口語辞典

「アルバイトするとしても」という条件節に言い換えることができることから、英文は「仮定節が適訳と考えられる」。

第三節 主体を表す体言を修飾する連体節の英訳手法

主体を表す体言を修飾する連体節について、いくつか用例を採った(68〜69、72)。連体節の表す範疇的意味は、「佐良木・新田2008」・「佐良木・岩垣2010」に基づいて分類して区別した。なお、以下では、主に従属接続の節を採りあげる。

第一項 連体節を従属接続節に英訳

・「時点」の連体節

- (68) 叔父に欺かれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、

漱石「こゝろ」

When I was cheated by my uncle, I felt very strongly the unreliableness of men.

McClellan, E. (Trans.)

・「条件」の連体節

- (69) アレルギーのある方は事前に申し出てください。

Please let us know ahead of time if you have any allergies.

会話作文 英語表現辞典

アレルギーがあれば、その方は」という条件法に解釈できないことから、英訳には二節が適切。

・「相反」の連体節

連体節と主節との意味関係が「相反」である事例を示す。これらと和文が逆接の等位接続に英訳される事例を示す。連体節と主節とが意味的に相反関係にあるときには、「今まで」「いつもは」「それまで」など現状認知の副詞、「あれほど」「あんなに」など強調の副詞、「かつては」などの新旧比較の副詞、「一旦」「一度」など事態が完了していることを表す副詞が文頭に出現する傾向にある。これらは、主節述部に対して、意味的に対比されている。これらを「前触れの副詞」と呼ぶことにする。

(70) 一旦堅く括られた私の行李は、いつの間にか解かれてしまった。
渚石「ハムン」

The trunk, once so carefully packed, was now lying open on the floor. McClellan, E. (Trans.)

「一旦堅く括られたのだが」という相反の節に換言可能である。英語は once という接続詞節を挿入する形をとっている。

(71) 一度壊したものは元どおりににはならない。

Once something is broken, it can't go back the way it was.

英語表現辞典

(72) いつもは念入りに結つてある彼女の髪も乱れたままに首筋にかかっていた。

Her hair, as a rule so elaborately arranged, was tumbling

untidily over her neck.

訳：岩垣守彦

「念入りに結つてあるけれど」という相反の節に換言可能である。英語は分詞構文を挿入する形をとっている。

第二項 連体節を分詞構文・等位文に英訳

連体節が英文では事態推移の分詞構文として表されている事例を観よう。

・時間的継起の連体節

(73) 一旦いいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外に仕方がなかったのです。
渚石「ハムン」

Having lost the opportunity that morning to unburden myself to K, I was forced to wait passively for another opportunity to present itself. McClellan, E. (Trans.)

「私は一旦いいそびれて……」とこういふ形接続に換言可能である。本文は事の成り行きを表している。こういう場合、英語では因果あるいは理由結論の従属接続詞節を採らず分詞構文で流すのが多いだろう。

・付帯状態の連体節

(74) これからどこへ行くところ、目的のない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。
渚石「ハムン」

Having no particular destination in mind, I continued to walk along with Sensei. McClellan, E. (Trans.)

右の二例文は、前章で言及した連体節の特質と分詞構文の好適な例である。

ここで、連用節やシテ形に換言できないが連体節について、若干の事例を採りあげる。こうした相反関係にある連体節―主節には、逆節の等位接続での英訳が適切である。

(75) もう着いていいはずの彼の手紙がまだ着かないんだ。

His letter should have arrived by now, but it has not come yet. 訳：岩垣守彦

岩垣の指摘に拠れば、letterが所有格hisで修飾されているので、関係代名詞により限定修飾することはできない【岩垣1994: 172-173】。原文は、手紙が遅れているという話であるが、非制限の関係節をhis letterの直後に挿入すると、手紙は来ないという反実仮想の話になるので、原文との意味の違いが生じる。

第三項 「連体節十人／者」が／も「いる／多し」の文型

連体節が英文では主節の述語動詞に翻訳され事例を観よう。

(76) 「煙草を吸う人って減ってるのかな？」最新和英口語辞典

I wonder if fewer people are smoking these days.

(77) 「あなたって何でもできるのね」「器用貧乏と言う人もいる

ひょうざい

You're good at everything, aren't you? / Yeah, but like they say, "Jack-of-all-trades, master of none."

最新和英口語辞典

連体節述語が思考や発話の動詞である。その英訳では、英語文型がthat clauseやX as Yを採る。例えば、連体節述語が、「と

思う・考える・予測する」と言う・主張する」などであり、これらに英語動詞+ that clauseが対応する【佐良木・岩垣2010】。

結章

本稿においては、以下の六点を確認した。

第一章・第二章においては、次の事柄を確認した。

一 時枝文法においては、対象語という文法範疇が導入されたことにより形容詞の意味分析が深められた。この分析深化の意義と制約とを見極めることにより、「連体形+係助詞―形容詞述語」の文型による古文の情意表現には、「他動的・因果的な感情惹起」の表現と「内的・自省的な感情生起」の表現とが備えられていること

第三章においては、時枝の古文用例を、文型的に整理することにより、以下の事柄を確認した。

二 古文の文型を次の三群四枝にわけたこと

- a₁ 「動詞連体形+係助詞―情意の形容詞述語」
- a₂ 「動詞連体形+係助詞―情意の形容詞補語+動詞述語」
- b 「動詞連体形+係助詞―動詞述語」
- c 「動詞連体形+「人」+(係助詞)―動詞述語+判断の助動詞」

それぞれの文型において、連体形が条件法として解釈可能であり、主節がa₁情意、a₂感性的判断、b判断、c感性的判断の文意を表すこと

第四章においては、

三 現代語においては、「連体形＋形式名詞＋係／格助詞―形容詞述語・動詞述語」および「連体節＋主名詞＋係／格助詞―形容詞述語・動詞述語」の文型の存在を確認し、両者ともに、連体形・連体節が古文条件法に当たり連用節に換言可能であること、かつ、前者は古文 a 群の情意表現に当たる感情表現であり、後者は古文の b 群・c 群に当たる判断の表現であること、および連体節を連用節に換言できるとき、連体形・連体節の述部と主節の述部との意味的連関があることを確認したこと

さらに以下の事柄を確認した。

四 英文従属節を、連用節ではなく主節主格に係る連体節に訳出する手法があること、および連体節による訳文は、連用節による訳文に比べて、自然な和文でありそれは主節主格を修飾する連体節は、ことの自然な成り行きを表現するための優れた表現態であることによること

連体節を連用節に換言可能なとき、その換言によって連体節と主節との論理関係を範疇で表現することができる。このときは、連体節の英訳は関係代名詞節ではなく分詞構文・従属節が適切であること

五 英語従属節を連体節に和訳する手法について、翻訳家の実例を取りまとめて下記のように整理した。

英日翻訳において、

(a₁) 従属接続節を連体節に和訳する手法が適切であること、

(a₂) 限定用法の英語関係節を条件節に解釈し連用節に和訳してもよい事例があることを確認したこと

一方英文では、ことの成り行きとして表すには分詞構文が適切であること、英語やドイツ語においても関係節による形容詞的修飾の表現と従属接続節による副詞的修飾とは、意味的に重なることがあるが、関係節と従属接続節との間で換言可能性があることを明確にしたこと。

第五章においては

六 主格主体を修飾する連体節を連用節に換言可能なとき、その英訳の方式は、連体節と主節との論理関係、その範疇の意味に応じて英語文型を選択すること、実践的手法の一つとしては、(β₁) 換言可能なときには従属接続節あるいは分詞構文への翻訳を選び、

(β₂) 換言不可のときには関係代名詞節あるいは同格節への翻訳を選ぶという基本方向を確定したこと

以上の本稿論述から、以下の諸点が明確となった。

「一」古文においては「対象語―形容詞述語・動詞述語」の文型による感情・感性的判断・判断の各表現において、連体形・連体節が条件法として解釈可能であることを確認することにより時枝説を、当該文型による感情と判断の表現の論として確立したこと

「二」現代文においても「対象語—形容詞述語・動詞述語」の文型による感情・感性的判断・判断があり、かつ、当該文型における連体節が条件法として解釈可能であること

「三」連体節から連用節への換言可否に応じて英語構文を選択すべきこと

連体節から連用節への換言によって連体節と主節との論理関係を範疇的に整理できること、論理範疇に応じて連体節から英語従属節への翻訳が適切であること

「四」「連体節を連用節に換言可能なとき、その英訳は従属節や分詞構文が適切である」という仮説が実証されたこと

今後の課題一

連体節の翻訳手法を体系化することは今後の課題として残されているが、以下に試案を記載する。

英日翻訳

a_1 関係代名詞節を、連体節に和訳

a_2 関係代名詞節を、従属接続節に和訳

a_{2a} 制限節を、条件節に和訳

a_{2b} 非制限節を、理由節に和訳

a_3 従属接続節を、連用節に和訳 (副詞的修飾)

a_4 従属接続節を、連体節に和訳 (形容詞的修飾)

日英翻訳

β_1 連体節を従属接続節に英訳

β_{1a} 連体節を従属接続節に英訳

β_{1b} 連体節を分詞構文に英訳

β_2 連体節を関係節に英訳

β_{2a} 連体節を限定関係節に英訳

β_{2b} 連体節を非限定関係節に英訳

β_3 連体節を名詞後置の形容詞的修飾に英訳

β_{3a} 連体節を分詞節に英訳

β_{3b} 連体節を後置形容詞節に英訳

β_{3c} 連体節を後置前置詞句に英訳

今後の課題二 文芸の翻訳

主体を修飾する連体節の文体的な特質と、対応する英語分詞構文の特質と明らかにすることで、文芸翻訳の方向性と可能根拠をわずかであるが本稿において見いだすことができた。感情表現や心理描写の統語的特質を、さらに明らかにしつつ文芸の個別作品の文体的修辭的把握が進むならば、機械翻訳において文芸翻訳への端緒を開くことができるだろう。

謝辞

本学教授新田義彦先生には、本稿執筆においても、また多方面においても、ご指導をいただきました。深謝申し上げます。新田

先生からは学的薫陶をうけるにとどまらず、出版ならびに国際学会・国内学協会における研究発表などにおきましても共著を賜りました。言葉に尽くせぬ学恩と友誼に御礼申し上げます。

参考文献

- 青木博史 2005 「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』Vol. 1 No. 3: 日本語学会 47-60。
- 稲垣智恵 2013 「万葉集における人称代名詞の連体修飾について——中国語欧化文法を考える一視点」『惑問』No. 23 関西大学近代東西言語文化接触研究会 55-78。
- 岩垣守彦 2003 「連体修飾つき日本文の変換処理について」『自然言語処理』情報処理学会研究報告 2003-NL-156: 45-51。
- 奥津敬一郎 2007 『連体即連用』ひこじ書房。
- 鍵本有里 1999 「万葉集における連体修飾——現代語との比較を通して」『国文学』No. 78 関西大学国文学会 373-388。
- 佐良木昌・新田義彦 2008 「主節主名詞に係る連体修飾節と主節述部との意味的相関の分析：連体節と英語文型との対照」『電子情報通信学会技術研究報告。T.L.、思考と言語』107 (432): 49-53。
- 佐良木昌・岩垣守彦 2010 「関係節を用いない、連体節の英語への変換パターン：情報の比重を連体節の英訳方法に取り込む」『電子情報通信学会技術研究報告。T.L.、思考と言語』109 (413): 7-12。
- 白井論・池原悟・横尾昭男・木村淳子 1995 「階層的認識構造に着目した日本語従属節間の係り受け解析の方法とその精度」『情報処理学会論文誌』Vol. 36 No. 1: 2353-2361。
- 信太知子 1970 「断定の助動詞の活用語承接について——連体形準体法の消滅を背景として——」『国語学』No. 82: 国語学会 29-41。
- 1977 「準体助詞「の」の活用語承接について——連体形準体法の消滅との関連——」『立正女子大学国文』No. 5。
- 1981 「上代語における連体形準体法について——万葉集を中心にク語法との関連など——」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館。
- 高橋泰邦 1982 『日本語をみかく翻訳術——翻訳上達の48章』バブルプレス
- 高橋雄一 2006 『日本語の連体節の構文についての研究』東京外国語大学博士學位論文 2006: 68。
<http://hdl.handle.net/10108/35626> 2014/11/15 取得
- 玉上拓彌 1967 『源氏物語評釈』第十卷 角川書店。
- 時枝誠記 1932 『国語学史 岩波講座「日本文学」』岩波書店。
—— 1933a 「源氏帚物語帚木卷冒頭の解釈「やるは」の語義用法に基づく」『国語・国文』Vol. 3 No. 3 (『言語本質論』時枝博士論文集第一冊 岩波書店 1973: 135-154) 所収)。
—— 1933b 「古語解釈の方法「やるは」を中心として」『国語・国文』Vol. 3 No. 9 (『言語本質論』時枝博士論文集第一冊 岩波

- 書店 1973: 155-200 (所収)。
- 1936a 「語の意味の体系的組織は可能であるか」『日本文学研究』京城帝大法文学会論纂 (前掲同書 205-253 に収録)。
- 1936b 「国語の品詞分類についての疑点」『国語と国文学』第十三巻第十号。
- 1936c 「形容詞形容動詞の連用形に於ける述語格と副詞格との識別について」『国語と国文学』第十三巻第十号、一二一頁～一二二頁 (『言語本質論』時枝博士論文集第一冊岩波書店 1973:255-266 に収録)。
- 1940 『国語学史』岩波書店。
- 1941 『国語学原論』岩波書店 2007。
- 1947 『国語研究法』三省堂。
- 1950a 『日本文法口語篇』岩波書店 1950a。
- 1950b 『古典解釈のための日本文法 (日本文学教養講座 (第14)』至文堂。
- 1953 増渕恒吉『古典の解釈文法』至文堂。
- 1954 『日本文法文語篇』岩波書店。
- 1955 『国語学原論続篇』岩波書店 2008。
- 1956a 『現代の国語学』有精堂。
- 1956b 『源氏物語の国語学的研究』『国語と国文学』Vol.33 No. 10
- 1958 「条件法として解釈される連体形の一用法」『国語と国文学』Vol. 35 No. 2: 1-9 (『文法文章論』時枝博士論文集第二冊岩波書店 1975:121-136 に所収)。
- 1959 『古典解釈のための日本文法』(増訂版) 至文堂。
- 1960 『文章研究序説』山田書院。
- 1968 編著『講座日本語の文法Ⅰ文法論の展開』明治書院。
- 1968 編著『講座日本語の文法』別巻『言語過程説の諸問題』明治書院: 64。
- 1980 寺村秀夫『名詞修飾部の比較』『日英語比較講座第2巻文法』國廣哲彌編集 大修館: 265。
- 1982 西尾寅弥『形容詞述語の史的展開』講座日本語学2 文法史 明治書院: 75-101。
- 2012 新田義彦『機械翻訳の原理と活用法 古典的機械翻訳再評価の試み』明石書店。
- 1969 根来司『平安女流文学の文章の研究』枕草子、源氏物語紫式部日記を中心として (笠間叢書5) 笠間書院 15-14。
- 1973 『平安女流文学の文章の研究 (続編)』枕草子源氏物語紫式部日記を中心として (笠間叢書30) 笠間書院。
- 1973 『源氏物語枕草子の国語学的研究』。
- 1971 萩谷朴『紫式部日記全注釈 上巻』日本古典評釈・全注釈叢書。林四郎 1977 『現代の文体』『岩波講座 日本語 10 文体』岩波書店: 319-393。
- 2003 半藤英明『係り結びと係助詞「こそ」構文の歴史と用法』大学教育出版: 34-52, 53-72。
- フレーゲ『意義と意味』『フレーゲ著作集 4 哲学論集』訳: 黒田

巨・野本和幸 勁草書房：71-102。

ボリンシヤ 1981 『意味と形』 じぶあん書房：262-293。

別宮貞徳 1983 『誤訳辞典』 バベルプレス。

益岡隆志 1997 『複文』 くろしお出版：167-180。

三浦ひとむ 1975 『日本語の文法』 第三章 「日本語の〈形式名詞—の〉とその使い方」 勁草書房：79-80。

水谷静夫 1951 『形容動詞弁』 『国語と国文学』 Vol. 28-No. 5 東京大学国語国文学会。

南不二男 1993 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店。

卷下吉夫 1984 『日本語から見た英語表現 英語述部の意味的考察を中心として』 研究社。

紫式部 『紫式部日記』 日本の文学古典編 古賀典子訳 ほるぷ出版：174-176。

柳田征司 1993 『無名詞体言句から準体助詞体言句（「白く咲けるを」から「白く咲いてゐるを」）への変化』 『愛媛大学教育学部紀要』 第2部 人文・社会科学 Vol. 25 NO. 2: 11-36。

渡辺実 1963 『現代文の特質』 『講座 現代語 第五巻 文章と文体』 明治書院：19-35。

Quirk, R., et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. Longman: 1238-1241.

Kane, T. S. 1983. *The Oxford Guide to Writing A Rhetoric and Handbook for College Students*. Oxford University Press: 229-242.

文芸作品資料

青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>

花村萬月 2004 『父の文章教室』 集英社。

松本清張 1971 『点と線』 新潮社。

翻訳関連資料

岩垣守彦 1992 『英語の行間を読む』 ジャパンタイムズ。

岩垣守彦 1994 『和文英訳のテクニック』 172-173 ジャパンタイムズ。

市古貞次、小田切進編 1987 『紫式部日記和泉式部日記』 日本の文学古典編 17 古賀典子校注・訳 三田村雅子校注・訳 ほるぷ出版

版

坂下昇編 1983 『現代米語コーパス辞典』 講談社。

坂下昇編 1984 『現代米語慣用語コーパス辞典』 講談社：Foggy Bottom の項・getting down to the brass tacks の項。

柴田元幸 1998 『生半可版英米小説演習』 研究社：90。
高橋泰邦 1982 『日本語をみかく翻訳術—翻訳上達の48章』（バベルプレス）。

別宮貞徳 1983 『誤訳辞典』 バベルプレス。

別宮貞徳 1986 『こんな翻訳に誰がした』 文藝春秋：96-97。
邦訳資料

相原真理子訳 1992 『検死官』 パトリシア・コーンウェル 講談社。
大石健太郎訳 1995 『ジョージ・オーウェル 空気をもとめて』

彩流社。

小野協一訳註 1957 『対訳オーウェル 2』 南雲堂。

片山亜紀訳 2015 『ヴァージニア・ウルフ 自分ひとりの部屋』 平凡社。

川本静子訳 1999 『ヴァージニア・ウルフ 私だけの部屋』 みすず書房。

工藤好美・淀川郁子訳 1965 『フロス河の水車小屋』 『ジョージ・エリオット』 世界文学大系 85 筑摩書房。

小林歳雄訳 1984 『ジョージ・オーウェル 空気をもとめて』 晶文社。

高橋正雄訳 1963 『ヘミングウェイ全集 1 われらの時代に』 三笠書房。

西川正身・安藤一郎訳 1952 『ヴァージニア・ウルフ 私だけの部屋―女性と文学―』 新潮社。

辞書事典資料

エドワード G・サイデンステッカー 松本道弘編集 1982 『最新日米口語辞典』 朝日出版。

北原保雄編 1987 『全訳古語例解辞典』 小学館。

ジャン・マケールレブ 岩垣守彦 2003 『英和イディオム完全対訳辞典』 朝日出版社。

ドナルド・キーンら編集 2004 『会話作文 英語表現辞典 第三版』 朝日出版社。

中村保男・谷田貝常夫 1984 『英和表現辞典』 研究社。

中村保男編 2008 『英和表現辞典』 基本表現・文法編 研究社。

洋書資料

Orwell, G. 1939. *Coming Up for Air*.

<http://gutenberg.net.au/ebooks02/0200031.txt>

2016/02/01 閲覧

http://www.george-orwell.org/Coming_up_for_Air/index.html

2016/02/01 閲覧

Cornwell, P. 1991. *Post Mortem* Avon Books. New York. 1991.

McClellan, E. 1957. Trans. Natume Soseki *KOKOKRO*. Dover Publications, Inc. New York.

Woolf, V. 1928. *A Room of One's Own*. Penguin Books.

注

(1) 「言語過程説の諸問題」『講座日本語の文法』別巻、明治書院、一九六八年、六四頁 時枝自身の言として、以下の講演記録がある。

昭和七年ころから、私が言語過程説の具体的な体系を、打ち立てることに、努力している時代なんです、七、八年から一、二、三年間、その間というのは、私のいろいろそういう過程説の体系をきき、ほとんどづにあれをどうしたらいいだろう、これをどうしたらいいだろうと、いろいろなことに、いろいろ、四苦八苦していた時代なんです。

(2) 時枝 1936a 「語の意味の体系的組織は可能であるか」(『言

語本質論』岩波書店：205-253、一九七三年に所収)

(3) 時枝 1940『国語学史』序説

時枝においては、国語学とは「研究者の如何に問わず、また言語としての価値の如何を問わず、一切の日本語的性格を持つ言語を研究する学問である」。「日本語的性格を持った言語ということは、日本語研究の究極において明らかにせられることであって、「最初から国語即ち日本語であるという定義は、国語それ自体の定義にはならないのではないか」という疑問を中心にして、「国語の方法論を考え、更に国語学史の立場を明らかにして行きたい」と述べている。また、国家の概念を含むものとしての国語の概念は国語学史における国語の概念ではないと述べている。

(4) 時枝誠記「古典注釈に現れた語学的方法」特に万葉集仙覚抄に於ける―」1931 京城帝大法文学会論纂「日本文化叢考」の中 刀江書院

(5) (1)前期前半における時枝の準備的な論稿群と『国語学史』との系譜関係、(2)前期後半の準備的な論稿群と『国語学原論』との系譜関係については、以下の文献を参照した。鈴木一彦「言語過程説の成立と文法」『講座日本語の文法 第二巻』明治書院：160-213。特に、(1)については、一六三頁～一七一頁、(2)については、一七一頁～一八〇頁を参看されたい。

(6) 時枝 1940『国語学史』

(7) 時枝 1936a「語の意味の体系的組織は可能であるか」(op.

cit.: 213-214)

(8) 時枝 1950a『日本文法 口語篇』「六 文の成分と格」岩波書店：223-241

時枝文法においては、文は詞と辞との結合によつて成り立ち、「文に於いては、詞は常に辞と結合して句を構成している」。「辞によつて統一された詞は即ち文の成分であり、文の成分を全体的統一との関係に於いて見た場合にこれを格ということは、従来の成文論で既に説かれたところである。」「文の成分及び格の概念は以上の如くであるから、成分及び格は、句の中から、辞を除いたものについて云われなければならないのは当然である。花が咲いた。

右の表現に於ける文の成分は、句「花が」「咲いた」から助詞「が」、助動詞「た」を除いた「花」「咲く」について云われることで、その両者の関係に於いて格と云うことが云われるのである。時枝文法では、文の成分を全体的統一において果たす役割から観て、格としては、述語格・主語格・修飾格・対象格を認め、単独のものとしては独立格を認めるのである。

(9) 時枝誠記「国語の品詞分類についての疑点」『国語と国文学』第十三巻第十号、一二二頁～一三二頁、一九三六年

時枝誠記「形容詞形容動詞の連用形に於ける述語格と副詞格との識別について」第十三巻第十号、一九三六年(『言語本質論』

岩波書店：255-266)

(10) 管見に入った限りでは、上の諸範疇を論じた論稿は同論稿以前にはないが、宣長の帰納的分析の批判的摂取や宣長・成章の「てにをは」論および活用論の批判的分析(時枝誠記『岩波講座日本文学 国語学史』など)、および古典語解釈研究に媒介されていると思われる。

(11) 『古典解釈のための日本文法』日本文学教養講座第14巻 至文堂 1950.53 および贈訂版 1959. 60-61 ならびに『日本文法口語篇』1950. 235-238 においては、下記の三つのカテゴリ分類に再編されている。

主観的表現の語——ほしい、のぞましい、恋しい、はずかしい、うらめしい、なつかしい
 主観客観の総合的表現の語——こわい、にくらしい、さびしい、暑い、すごい、面白い
 客観的表現の語——高い、赤い、はげしい、早い、堅い、細かい

(12) 西尾実「形容詞述語の史的展開」1982. 92-93
 感情の対象や機縁となるものは、いつも対象語の資格における名詞や名詞句によって表現されるとは限らない。同じような事実関係が、条件句によってもあらわされる。：

「已然形+ば」の確定条件法でむすばれる前後両句の間の意味関係に、山口堯二氏(山口堯二『古代接続法の研究』明治書院 1980 三章の一)は因由性、機縁性、呼応性、志向性の四種を認められた。因由性は前句が後句の原因理由にあた

る関係であるのに対して、機縁性は、前句が主体の行為を表し、その行為を機縁として主体の遭遇する事態が後句になっているという関係である。主体の遭遇する事態は、主体の心中に形成される心理内容にかたむく場合もあるとし、その例の中に

妹と来し敏馬の崎を還るさに独りし見れば(者)涙ぐましも(万・一発)

もあげられている。いま問題としている、感情形容詞の述語に対する条件句になっている場合は多くは、山口氏の分類にしたがえば、この機縁性の意味関係で、後句が心理内容にかたむいているものに属することになる。：

(13) 以上の用例中、(六)と(二十)には、係り結び「こそーけれ」が認められる。半藤 2003 によれば、源氏と同時代の枕草子では、「こそーけれ」の結びの語として、情意の形容詞「をかし」「めでたし」「にくし」等および感覚動詞「おぼゆ」「きこゆ」「見ゆ」・補助動詞「あり」「侍り」が多くを占め、感動の表現価値を有することである。さらに、「こそその結びが形容詞述語文であるときは、文意がほぼ話者の心理的内容の表明となる。」[ibid. 34-52] とも指摘している。

(14) 北原 1987『全訳古語例解辞典』北原保雄編小学館

(15) 根来によれば、松尾聰『覚え給ふ』の語義』『講座解釈と文法 源氏物語・枕草子』1969の調査では「おぼゆ」はすべて「何々のおぼゆ」という形で用いられ「何々をおぼゆ」とい

う形は二例のみとのことである〔根来 1973: 154-155〕。

(16) 根来 [1973: 154-155] によれば、枕草子においては、「をかしく覚ゆ」との事例は散見されるが「をかしく思ふ」の例はない。また、「平安女流が情意性形容詞の終止法で文を止めたものを学者は感情をなまのまま停滞亡く表出しているとして怪しむことがなかったのをわたくしは静につつましく文を終止しているとした。それは上に述べたように情意性形容詞が終止法であるばあいその対象語はガ格をとって絶対にヲ格をとらないからであり、そしてそこに「思ふ」の気持ちを含んでいず「おぼゆ」の気持ちを含んでいるからであった。知られるように源氏物語には情意性形容詞が非常に多く用いられその終止法もやみなしに現れるが、それは感情を直裁に簡潔に表出しているのではなくやはり低回的に緩徐的に表現していると思うのである。」

(17) 半藤 [2003: 46] によれば、枕草子では、結びの語を、感覚動詞が担う例が多数みとめられるとのことである。「読経する僧の) 目をくばりつつよみぬたるこそ、罪や得らむとおぼゆれ」この例のごとく、「こその結びが動詞の場合には、その文意は話者の感覚的なものを表すのが数値的に圧倒的」と指摘している。

(18) 三浦つとむ『日本語の文法』第三章「日本語の〈形式名詞〉—「の」とその使い方」勁草書房 1975: 79-80

この種の〈名詞〉は、抽象レベルが高くなればなるほど、

こうした実体的なとらえなおしに使われることが多くなる。「私のこと」のような、独自の対象の直接的な把握の表現よりも、「干渉したこと」のような、さきに表現された属性を媒介的に把握した実体概念の表現に使うほうが、むしろ普通になっていく。「の」にいたっては、圧倒的に媒介的に把握した実体概念の表現に使われている。

(19) 水谷静夫「形容動詞弁」『国語と国文学』1951 Vol. 28 No. 5 東京大学国語国文学会

我々が客體界に対して認識作用を営むや、対象はすべて概念として把握せられる。また主體の認識は大抵の場合、思考の方便上實體とその属性とに分節化する。これを言語の表現面に投影して實體と思考したもの、の概念を主語に表はし、属性と思考したことの概念を述語に表はすのである。即ち属性的概念は、属性が實體から分立し實體の實として再び統合されるものと見るロゼックによつて、常然實體視せられ難い。この故に属性的概念を指す語はそれが屢々思考の対象となつて容易に實體視出来る習慣が成り立つてゐない限り、格助詞がつきにくく殊に主語になりにくいのである。形容動詞語幹と呼ばれて来たものは、まさしくその典型であらう。「語幹」に格助詞がつかないのは、従つて、それが一単語を成さないからではなく、格助詞が實體視された概念を指す語につくものだからなのである。勿論言語と思想とは別物に違ひない。しかしながら言語の構造が、思想とは別なるが故に思想を離

れて(何時も)独自の法則を有つと考へるのは、迷妄である。名詞の中でもいはゆる形式名詞が單獨では、また先に奉じた例に見える「有徳 必謙」などの漢語は、決して主語にならず、殊に後者は格助詞も自由につきはしない。ところでこれは「花 庭」などと語の本性が違ふのでなく、實體視し難い概念を指す語といふ思想上の制約に過ぎない。強ひて形容動詞を見分ける第一の目安を適用すれば、右のやうな異質の語まで同類に混じてしまふ懼れがある。この危険を防ぐ方法は、やはり「形容動詞」を二語に分解して扱ふ事である。

- (20) Woolf, V. 1928. *A Room of One's Own*. Penguin Books
 All seducers and reformers are responsible: Lady Bessborough when she lied to Lord Granville: Miss Davies when she told the truth to Mr Greg. All who have brought about a state of sex-consciousness are to blame, and it is they who drive me, when I want to stretch my faculties on a book, to seek it in that happy age, before Miss Davies and Miss Clough were born, when the writer used both sides of his mind equally.

- (21) 日英翻訳者の Peter Moore 氏 (米国加州) による指摘である。

- (22) 補節 1 形式論理学における条件節として解釈される関係節

ドイツ語や英語においては、関係節と条件節との間に、意味

的に等価関係が成立する場合があることが知られている。この点を最初に指摘したのは、百年以上前のゴットロップ・フレーゲであろう。Über Sin und Bedeutung フレーゲ『意義と意味』において、形容詞文と条件文との換言可能性について言及している。フレーゲは形容詞文(関係代名詞節)が条件文(条件節)に換言可能であると述べている。その要点を約めておく。

ある数が1より小さく0より大きいならば、その平方も1より小さく0より大きい。

wenn eine Zahl kleiner als 1 und grösser als 0 ist, so ist auch ihr Quadrat kleiner als 1 und grösser als 0

(if a number is less than 1 and greater than 0, then the square thereof is also less than 1 and greater than 0)

形容詞文もまた条件文を代行しうるのだ。以下のように書き換えることができる。「1より小さく0より大きい数の平方は、1より小さく0より大きい。」

das Quadrat einer Zahl, die kleiner als 1 und grösser als 0 ist, ist kleiner als 1 und grösser als 0.

(the square of a number which is less than 1 and greater than 0 is also less than 1 and greater than 0)

独語原文の英訳は筆者によるもの

ところが、主文と副文に共通する構成部分が固有名で表示されるときには、事情は全く異なる。

「自分の右翼に対する危険を認知したナポレオンは、自ら自分

の近衛兵を率いて敵陣へおもむいた。」

Napoleon, der die Gefahr für seine rechte Flanke erkannte, führte selbst seine Garden gegen die feindliche Stellung.)」²⁾ いう文におけるは、

1 ナポレオンが自分の右翼に対する危険を認知した

(Napoleon erkannte die Gefahr für seine rechte Flanke.)

2 ナポレオンが自ら自分の近衛兵を率いて敵陣へおもむいた

(Napoleon führte selbst seine Garden gegen die feindliche Stellung.)

という二つの思想が表現されている。主文と副文に共通する構成部分が固有名である。

「ナポレオンは察知したので敵陣に赴いた」という因果論的文は導くことはできるが、「ナポレオンが察知したならば敵陣に赴いただろう」という仮定文は導くことはできない。

形式論理学でいう全称量詞が被さる名詞が、後続の条件節全体を範囲に取るとき、この条件節が全称量詞を限定する関係節と等価にみえる。このことは、さして驚くことではないといった言説もある。このように副詞節が形容節に意味的に等価である事例を確認できる。

以上のフレーゲ記号論理学の観点からの言語学的知見と同様の知見が、英文法教科書の権威においても展開されている。次

節に要点を記す。

補節 1 *A Comprehensive Grammar of The English language*

における関係節と条件節との換言可能性

① 関係節を従属接続詞節に換言

a 非制限関係節には、原因や理由の副詞節的機能がある

Quirkらは、非制限の関係節は副詞節に似ることがあり、副詞節に言い換えることができると指摘して次の事例を挙げている。Quirk, R. et al. [1985: 1241]

Ann thanked her teacher, who had been very helpful.

対照的に一般性のある先行詞を伴う制限関係節は条件関係を表す。

β 制限関係節には、条件の副詞節的機能がある

Students who work hard pass their exams.

[‘If students work hard, they pass their exams.’]

固有名詞には限定用法の修飾はできない。しかし、一時的に普通名詞としての特徴があるときには、制限的修飾が可能である。

the Springfield that is in Illinois

イリノイにあるスプリングフィールド、スプリングフィールドは各州にありどの州かを指定したいとき

the Johnson who wrote the dictionary

辞書を作ったジョンソン、ジョンソンは何にもいるので、

どのジョンソンかを特定したいとき

非名詞句が先行詞 (文先行詞) であるときは制限修飾は不可であるが、文先行詞の非制限修飾は可能

He likes dogs, which surprises me.

あいつが犬好きであるとは驚きた。

(英米のジャーナリズムでは、右の文体がよく用いられる。主節が原因事態を表し、後続の非制限関係節が結果事態を表している。)

② 制限的關係節 (先行詞は一般人称や一般物) が条件の關係を表す事例

Students who work hard pass their exams.

がんばって学ぶ学生は試験に通る。

If students work hard, they pass their exams.

がんばって学ぶば学生は試験に通る。

この事例のうちに、制限關係代名詞節を条件節に換言できぬ。形式論理的な知見としては「否定文」では非制限修飾は不可である。

* *I won't see any person, who has not made an appointment.*

対照的に、非制限修飾は平叙文 (断定文 declarative sentence) の先頭の語については可能である。

Someone, who sounded like your mother, called to say she wanted to see you.

先頭の語に非特称限定詞 (＝全称限定詞) が付くとき、限定修

飾のみ可能で、非限定修飾は不可である。

* *Every book, which is written to deceive the reader, should be banned.*

* *All the students, who had failed the test, wanted to try again.*

しかし、非限定修飾の事例もしばしば見かける。

All the students, who had returned from their vacation, wanted to take the exam.

学生は皆、休暇から帰ってきて、試験を望んだ。
The students, who had all (of them) returned from their vacation, failed the test.

学生は、皆、休暇から帰ってきたが、試験に落ちた。
* *The students who had all (of them) failed the test wanted to try again.*

All the students who had failed the test wanted to try again.

試験に落ちた学生は皆、再試験を望んだ。
Some of the students requested makeup exam because they had failed the test.

学生の中には再試験を望んだ、試験に落ちたから。

(注意すべきは、以下の事柄である。)

・英文では、唯一無二の実体は關係節限定修飾できない

・和文では唯一無二の実体でも連体修飾できる)

(23) 日本大辞典刊行会 1976 『日本国語大辞典』小学館「悪い」の項 17

(24) ポリンジャ 『意味と形』ごびあん書房 1981: 262-293。

(1) It was foolish for Mary to go there.

メアリーがあんなところへ行ったのは、ばかなことだった。

(2) It was foolish of Mary to go there.

あんなところへ行くなんて、メアリーはばかなことをした。

(3) Mary was foolish to go there.

あんなところへ行くなんて、メアリーはばかだった。

傍線は引用者によるもの

「タイプ 3 の構文は感情がむき出しであるが、タイプ 2 の構文には、「タイプ 3 に比べて、形容詞の影響力を和らげる効果があるように思われる。話し手は、人の悪口を言うとき、気を使わなければならないということがあるから、その攻撃目標をそらすように思えば、形容詞の的一見、人物ではなく行為にしばられるようにみせかければよいことになる。そういう意味で、*of* 構文は婉曲的表現なのである。」

タイプ 3 の構文では、個別実体である主語と評価的な形容詞述語とが繫辞によって結ばれるという判断文であり、ここでは、*of* 不定詞が表す行為はメアリーに付随している形である。タイプ 2

の *of* 構文では、一方では、一般的抽象的存在を表す *of* を主語に置き感情的な評価形容詞と繫辞 *be* で繋ぐことで普遍判断の形式をとり、判断の主観性を回避している。他方では、判断の内容は *of* Mary to go there として分節されている。つまり、判断それ自体と客観的な事柄 *of* 判断内容たる命題とが分離されている。